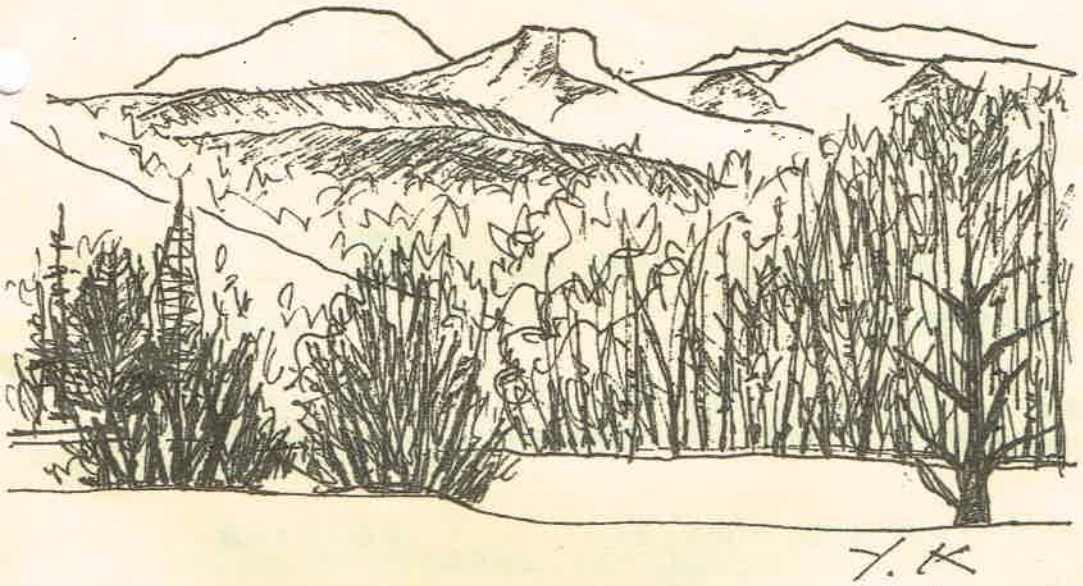


# エゾアツ



2012 春季号 100

北海道ボランティア・レンジャー協議会

## 目 次

「エゾマツ」100号 2012年3月28日

「モモ」

会長 春日 順雄

1 自然観察会から

- ・赤灯台から日和岬へ 小樽市 輿水 慶子
- ・円山冬山登山観察会 2012年1月15日 札幌市 児玉 諭

2 調査、研修などから

- ・2011年度 今年出合った植物から 思うままに 平取町 川村 桂介
- ・アメリカ合衆国への旅のお勧め 札幌市 川田 貞

3 下見研修のレポートから

- ・身近な樹木のはなしあれこれ 札幌市 熊野 美子
- ・オサムシ 江別市 土屋 忠司
- ・「竹」 札幌市 伊藤 秀平
- ・「木」 札幌市 今村ひろこ
- ・「西岡水源地観察会」 札幌市 道場優作

4 連載

- ・球果のこと 苫小牧市 谷口勇五郎

5 オホーツク支部 機関誌 「流氷」から オホーツク支部

6 NOW 7号 谷口さん執筆

7 今年度（27年度）事業計画 事務局

- ・今夏の北大雨竜研究林での研修（案）
- ・小樽支部観察会予定表 小樽支部

8 事務局便り 総会、写真展の案内 など

<編集後記>

# 「モモ」

春日 順雄

「モモ」は、ドイツの児童文学作家のミヒャエル・エンデの作品です。「時間ドロボー」の名で映画化もされました。世界各国語に翻訳されています。日本は、ドイツに次ぐ二番目に読者の多い国です。

大きな都会のはずれ、市街地がつきはて原っぱや畑がはじまり、家々のたたずまいもだんだんわびしくなってくるあたりに小さな円形劇場の廃墟がありました。そこに、モモという女の子が住みつきます。そのモモの姿たるやたしかに異様です。背が低く、かなりやせぼつちで、まだ8歳ぐらいなのか、それとももう12ぐらいになるのか検討もつきません。生まれてこのかた一度も櫛を通したことも、はさみを入れたこともなさそうな、くしゃくしゃにもつれた真っ黒な巻き毛をしています。目は大きくて、素晴らしく美しく、やはり真っ黒です。足も同じ色です。いつも裸足で歩いているからです。

近くに住む人たちがモモの所に集まって来るようになります。モモの生活の手助けをします。そして、人々の上に変化が現れてきます。モモは人々にとってなくてはならない存在になります。いつでも誰かがモモのそばに座って何か一生懸命に話し込んでいます。モモには特別な能力が備わっていたのでしょうか。

小さなモモに出来たこと、それはほかでもありません、相手の話を聞くことでした。なんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんて、誰にだってできるじゃないかって。でも、それは間違いです。本当に聴くことの出来る人は、滅多にいないものです。そしてこの点でモモは、それこそ他には例のない素晴らしい才能を持っていたのです。彼女はただじっと座って、注意深く聞いているだけです。その大きな黒い目は、相手をじっと見つめています。すると相手には、自分のどこにそんなものがひそんでいたかと驚くような考えが、すうっと浮かび上がって来るのです。

ミヒャエル・エンデがモモを通して私たちに送り届けたメッセージのひとつは、聞き上手になれば、会話を大事にしなさいということです。

モモの所に集まってくる人たちは決して裕福ではありません。時間はゆっくりと流れています。ゆとりがあります。集まってのオシャベリを通して隣近所の人たちの心のふれあいはしっかりしています。孤独死ということも起こらないでしょう。

科学の発達によって私たちは便利な情報伝達手段を手に入れました。でも、それは便利さと不確かさを併せ持ったものです。

電話・携帯電話・ファックス・メールなど、伝わる速さは瞬時で、広がりも全世界的です。でも、相手の顔と表情は伝わりません。話は聞くものであり、見るものです。講義を聴くは見ることでもあります。生の演奏では聴衆は演奏者の方を見えています。聴くは見ることです。

人に物事を依頼するには、文書だけでは失礼だからと、電話もします。あるいは訪問して依頼もします。劉備元徳が諸葛孔明のもとを三度訪れて依頼した「三顧の礼」の故事からは出向くことの大切さと話し合うことの大切さを学ぶことが出来ます。

電話・携帯電話・ファックス・メールなどは便利なものですが、話は見るものであるという視点を欠いています。そのことをわきまえた使い方が必要でしょう。

電話は目の前に話し相手がいらないものですから、言葉調子、言葉遣いが乱暴になりがちです。

ファックスやメールも便利なものです。書き言葉ですから話し言葉と違う難しさがあります。言葉の使い方によっては誤解も生まれることもあります。

科学技術の進歩によって人々の生活は便利になりました。しかし、それは、使い方によっては、「聞き上手、会話の大事さ、心を通い合わせる」とは、ずいぶん、かけ離れたものになって

しまいます。心を紡ぐ使い方を大事にしなければと思います。

モモの身边に転機が訪れます。人々は時間を時間貯蓄銀行に預け、ゆとりを無くしていきます。その非に気づいたモモと子どもたちは反対のデモを行います。モモは時間貯蓄銀行一派から狙われることとなります。そのモモに救いの手をさしのべるのが、時間を司るマイスター・ホラです。亀の「カシオペア」をモモの元に差し向けます。「カシオペア」はこれから起こる30分前までを見通す能力を身につけています。追っ手の通る路が分かりますから、そこを避けてゆっくりと進みます。かくして、モモはマイスター・ホラの元で暮らします。そして、一日の眠りにつきます。ところがその一日は、現世では一年でした。

眠りからさめたモモは再び円形劇場の廃墟に戻ります。浦島太郎みたいで。周囲の人々の生活は一変していました。モモの所には誰も集まってきました。

モモは、町はずれに小さな店を借りて居酒屋をやっていたニノを訪ねていきます。ところが、すっかり様子が変わっていました。「スピード料理レストラン・ニノ」に変わっています。忙しく立ち働くニノはモモと満足に話も出来ません。

次にモモは、ジジを探しに行きます。ジジは有名な物語作家のジロラモになっていました。モモに会って大喜びしてくれます。ところが、ジロラモにはマネージャーがついていて時間を管理されています。モモとは飛行場に向かう車の中で話し合ったことだけで終わります。

そして、モモの所に遊びに来ていた子どもたち。何日も円形劇場の廃墟に集まってモモの帰りを待っていたのです。ところが、時間貯蓄組一派の策略で親たちが動き、行政が動いて、各区ごとに「子どもの家」という施設が出来ます。「これからの社会に役立つ子どもを育てる」の名のもとに、今はそこに通っています。そこには子どもたちが遊ぶ遊びはありませんでした。

エンデの現代社会に対する痛烈な指摘が感じられます。というのは、これと似たようなことが、世界中のどの国にも起こっています。日本では、子どもたちの遊ぶ姿がめっきり少なくなりました。塾や習い事に大忙しようです。大人たちは、時間にゆとりがなくて慌ただしく生活しています。合理性の名のもとに、人と人との会話の機会も減ってきました。社会全体がそんな風潮の中にあります。

エンデは、この物語で時間に追い立てられるようにあくせく動き回る人たちと、時間をお金で買い、そのお金を投資してマネーを生む経済システムについても書きたかったと、後日述べているそうです。エンデのメッセージの二つ目は、1年の眠りから目覚めて現世にもどったモモを通して、現代社会への痛烈な批判をしていることです。円形劇場の廃墟に集まり、ゆったりと生きる人々の暮らしと、モモが浦島太郎の様に立ち戻ったときの人々の暮らしを対比的に扱い心豊かに生きるはどう言うことか。人間生活のあり方への根源的な問いかけであります。

さて、お話は続きます。モモの前に時間貯蓄銀行の一派が立ちはだかります。モモはひるみます。逃げ回ります。でも、「本当に危険にさらされているのは、ゆとりを無くした大人たち、子どもたちだ。これらの人たちを自由にするように時間貯蓄銀行一派を説き伏せる見込みのあるのは自分だけだ」と、自覚したときにモモは、自分の中に不思議な変化が起こったのを感じます。モモと時間貯蓄銀行一派たちとの戦いが繰り広げられます。時間貯蓄銀行一派は時間を司るマイスター・ホラに会わせることを要求します。そして、「なにもない家」に住むマイスター・ホラの元に急ぐモモとカシオペアの後を執拗に追いかけます。このような戦いを通して貯蓄された時間を解放しモモは勝利します。人々の生活にゆとりがもどってきます。

この時間の解放の戦いに歩みの遅いカメとホームレスのような暮らしをしているモモに大事な役割を担わせたミヒヤエル・エンデの意図や如何に。私たちは忙しく過ごしすぎているのかなど、思うことでした。そして、背景にある経済システムも気になることでした。

二月四日、小雪が降り、年開けの観察会としては、いつになく寒い。カラフル隊二十一名は、天狗山山頂から尾根筋の林へと入って行く。雪はふかふかで心地よい。

「みなさん、足跡がついてない新雪を歩くのも、気持ちがいいものですよー」

レンジャー北原師は、カンジキ歩きの初心者たちを、魅惑の雪原へといざなった。

エゾマツは雪枝を豪快に垂らして気持ちよさそうだし、ダケカンバは枝の付け根に積もった雪が重そうだ。どちらも冬山の景色には、欠かせない木である。師は、

「遭難した時、エゾマツの下にもぐって枝葉を寄せると、一晩くらいは助かります」

と、冬山の怖さを覗かせるのも忘れない。

立ち止まって、アズキナシの実、ミズナラの冬芽、シナノキの芽鱗などを観察した。

「樹肌の違いは見た目だけでなく、素手で触ってみると分かるんですよ」

師は太い枝を撫でてみせるので、私も即、真似をして、手袋を脱いで触ってみる。

さして冷たくもないのは、手が冷えているからか。それにしても、木は寒さに強い。

時折、お日様が裸木の間からぼんやりと覗き、木立ちの影がうっすらと伸びた。やがて雪は止み、かすかな光に、雪のかけらが震えるように光る。嬉しい瞬間だ。

大曲を過ぎ、腹ごしらえをしてから、難所と脅された急坂を下った。穴にはまる者、助け出す者、尻で滑る者。私もゴロンと転がる者になって、カメ虫みたいにあがく。

やっと起き上ったら雪まみれ。なんのなんのこれしきと、大股で雪を蹴散らしていく。

楽しいなー。身も心も解き放たれ、犬コロのように喜んでいる。雪・雪・雪だ！

下り終えると林道で、「ハリギリ」、「ドロノキ」と、木の名を当てながら歩いた。

「これが分かったら凄い」

と師は言って、幹が黒く、肌がつるつるしている木に、みんなを挑ませた。

色々名をあげてみたが、見事に外れた。その名は「ニガキ」。いつもニガキとキハダにはしてやられ、にがき思いがするから、「ニガキ黒」として覚えることにした。

次のヤチダモを私が当てると、「よく分かったねえ」とほめられた。

ヤチダモは思い出深い木なのだ。かつて田舎に住んでいた頃、幼子と一緒に、名も知らぬ裏藪の大木に「神様の木」と名付け、崇めていたのがヤチダモであった。春の夕暮れには鳥が群がり、芽吹きは他の木よりずっと遅かった。敵かに天に向かって命の芽を吹くというふうで、心に響く声なき声を、いつも感じさせる木であった。

思い出にちょっぴり浸っているうち、林道歩きも終盤になった。

北嶋師が行程を締めくくり、このあたり一帯が海であったこと、噴火し、隆起して陸地になったこと、二万年前に水が引いて、勝内川の川底が表れ、谷底は現在の港にある赤灯台と白灯台の間を通過して、日和岬の五キロ先まで続いていたことを語った。

壮大な古代のパノラマを胸に描く。いつも見ている海辺の風景が、違ったもののように感じられてきた。海を想う。

今頃、赤灯台あたりで、オジロ鷺が日和岬を指して飛んでいるだろうか……。

なんだか急に、海が見たくなった。

## 円山登山観察会 2012年1月15日

円山はわたしの自然観察のホームグラウンドで、例年この観察会を楽しみにしています。冬の観察会は華やかな花がなく何もない季節と思いがちですが、注意深く目を凝らすと意外と周りに潜んでいるものがあるのです。今年は、例年に比べて寒い日が続いたせいでしょうか、お客さんが4人と少ない観察会でしたが、そのぶんスタッフの菅さんやレンジャーの方々の話をじっくりと聞き、楽しく学びました。

### ○登山道に落ちていたもの

円山に多いカツラ：食べ頃を過ぎた黒い小さなバナナです。いつも思うのは、バナナに入っている小粒のタネ。どうして、大きな木なのに小さ過ぎるタネなのか不思議です。

ひねくれるアサダ：タネの入った袋は、昔の学校からの文書が入った薄い茶封筒です。

ハリギリの実：雪面でパチパチする黒い線香花火です。

ツルアジサイ：冬、多く目にするけど、仲間との違いは装飾花の枚数が一番の決め手になります。

アズキナシの実：干からびた茶色になった実は、点々がナシのしわしわアズキでした。

シナノキのタネ：タネの上にある翼の形は相当の変りもの。この形で一番に想い浮かぶのはカマキリの姿です。翼からタネまですらっと伸びているのでタンチョウというのもあります。

カエデ類のタネ：種類は当てられないけど、タネのところが付いていれば槍の先、刺又（さすまた）という槍の先です。そうして、逆に付けると天使の羽です。

### ○冬芽

真冬で冬芽は目を覚ましていないようで、しっかりと閉じられていました。サワシバの学習では、針状で40度の角度で付くとメモしました。

### ○野鳥

ヤマガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラは円山でも定番の鳥です。最後に西町分岐付近でアカゲラを見ることができました。メモにはオオアカゲラのみと書きましたが、現地では区別ができませんでした。

### ○足跡

一直線に並ぶ足跡でキツネだそうです。観察会後に注意しているとうちの庭の足跡も一直線のような気がします。人懐こいキタキツネがいて時々見かけるんです。

### ○その他

第37番石仏付近の何の大木か確認できませんでしたが、ちょうど目の位置にヤドリギの子どもが生育中です。

ナラ+メニセ+ハナフシ→ナラ+メ+ニセ+ハナ+フシ→ナラの芽に付いた花のような虫こぶ→納得です。

# 2011年度 今年出合った植物から 思うままに

平取町 川村 桂介

## 1. 幌尻岳登山道周辺で

昨年、野草の写真撮りに連れていってもらった幌尻林道でアボイ岳固有種になっているはずのアボイカラマツに偶然出会ったのであるが、それを機に今年はこのアボイカラマツの出る幌尻岳登山道周辺を調べてみることにした。

調査には6月から10月まで月に2回ずつ入林する予定であったが、6月から8月までは予定通り2回ずつ入林できたものの、9月と10月は予定していた日が悪天候のため9月は1回だけ、10月は1回も入ることができず結局7回の入林となった。

幌尻林道は、幌尻岳に向かう登山道になっていて、登山客の宿泊施設になっている豊糠山荘から約2.2 km上ったところに第1ゲート(昭北森林管理が管理している)が、そして更に3 km上ったところに第2ゲート(北電管理)が設置されている。今年の6月までは第1ゲートの車止めまでは一般車両も自由に行くことができたのであるが、7月からは自然保護のために豊糠山荘からほんの5 km上った所にもう一つ新しいゲートが作られ、それより上は車の乗り入れが規制されるようになった。このゲートは平取町が管理し、町から入林許可書を出して貰いゲートの鍵を借りてこなければ車では入れないのである。登山者のためにシャトルバスが豊糠山荘から第1ゲートまで運行するようになったが、登山者は勿論、溪流釣りや山菜取り、ハイキング等で入林する人達もこのシャトルバス(価3500円)を利用するか徒歩でいくことになる。

植物調査に入るという名目で「入林承認申請書」を役場と森林管理署から出してもらい、林道入口のゲートと第1ゲートの鍵は借りることができた。北電管理の第2ゲートの鍵は手続きが面倒で借りるのを諦め、そこから上は歩いての調査となった。

調査の範囲は、主に第1ゲートより上の方で、第2ゲートを過ぎ、取水口(ここから田舎の川に注ぎ、縮み水を溜めている。ここから水は種はく山道となる)までの片道約8 kmの林道である。以下は新しく出合った植物である。

アボイタチツボスミレ、ノウゴウイチゴ、ヒダカアザミ、オモメラン、エゾノサワアザミ、タカネイワキナギ、ジャニンジン、エゾノキリンソウ、エゾミセバシ、ヒメゴヨウイチゴ、ミヤマハナシノブ、コウモリ、アマチャズル、オオバタケシマラン、タカネノガリヤス、ミヤマドジョウツナギ、アオカモジグサ、オオトボシガラ、イヌシダ、ニオイシダ、ヒモカズラ、コケシノブ、オオエゾデシダ、ショウジョウスゲ、キンチャクスゲ(イワキスゲ)

## 《 ヒダカアザミ 》

ヒダカアザミは、植物写真家であり植物図鑑や自然ガイドブックそれに山岳ガイド等いろいろな本を執筆されている梅沢俊さんが発見されたアザミである。発見された当初は大型の頭花を下向きに付けるということでチシマアザミと見做されていた。しかし、このアザミが発見されてから20年もの間、茎葉が分裂せず、基部が耳状になり茎を抱くなど従来のチシマアザミとの違いがずっと問題として囁かれていたのであ

る。それに終止符を打ったのが国立科学博物館の門田裕一博士で、1999年に「国立科学博物館研究報告第25号」に新種ヒダカアザミ（キルシウム・ヒダカモンタム）として発表されたとのことである。（クラムボ第9号：ヒダカアザミとヒダカアザミの鑑別）

#### ヒダカアザミの特徴

- ① 頭花が血赤色（ワインレッド）である
- ② 瘦果に稜がある
- ③ 総苞の外片が5列である
- ④ 茎葉が分裂せず、基部が著しく耳状に抱茎する

このヒダカアザミが、幌尻岳登山道にも群生している。しかし、ここに生育しているヒダカアザミは②、③、④の条件はクリアしても①の花のいろが当てはまらないのである。ここで見られる多くのものは、花の色がワインレッドではなく薄いピンクをしているのである。たまたま日陰に生えているものは色が薄くなるのかな？と初めは思っていたのであるが、日向に出るものもピンク色をしているのである。

浦河町のシマン川の周辺（天馬街入り付近）に群生しているヒダカアザミも見ているが、そのものは①～④をクリアするものであった。

幌尻岳の登山道で見られるこのピンクの花を付けるアザミもヒダカアザミだとすると、ヒダカアザミの特徴として①で挙げられている花の色については、何もワインレッドに限ったものではないことになる。しかし、図鑑にはワインレッドの花を付けるヒダカアザミが額平川コースでも見られることになっているので、取水口より上部の日高山脈のカルル辺りにはワインレッドのものもきつと出るのであろう。とすると、標高の低い山麓に出るものは、花の色が薄くなるということになるのではないだろうか。それとも標高差には関係なく、登山口辺りの環境が本来ワインレッドであるはずの花の色をピンクにしているのだろうか。

このことは、これぐらいの不十分な粗末な調査結果で推論することはできないであろう。登山口周辺の微気候というか温度や湿度、風、日照などの気象状態、それに回りの地形や地質、土壌、植生等を調べる必要がある。そしてワインレッド色のヒダカアザミが生育している標高の高い所やここ以外のヒダカアザミの出る別な産地でも同じような調査をし、それらと対比したり分析したりして考察しなければならぬだろう。ヒダカアザミは日高側ではここ幌尻岳の額平川コースや天馬街道（野付峠前）の他、幌尻岳のチロロ川コース及び新冠川コース、ピセナイ山、ベンケヌーシ岳の六の沢、ボンアブサリ川林道（樺太）等でも見られるという。

また、ここでは梅沢俊著の「新北海道の花」にも述べられているように、チシマアザミとの中間型と思われるものも多く、茎葉の基が翼をつけて葉柄状に延下しながらも抱茎しているものや、瘦果には稜があり総苞の外片も5列になっているなど花はヒダカアザミなのであるが下部の茎葉が分裂しているものも多く見られる。

そんなことで、このピンクの花を付けるヒダカアザミもひょっとすると中間型の一型なのかな？それとも新種のアザミなのかな？と思ったりもするのである。日高山脈固有種である。



## 《 エゾノサワアザミ 》

エゾノサワアザミは、登山道の傍らや林縁に多く生育している。まだ花を付けていない春先には、莖高が30cm位で莖や葉に剛毛を多く付けていて、しかも幌尻岳に生育しているということでミヤマサワアザミかな？と思っていたのである。しかし、花期になると、背丈が1mを超えるものや花をいっぱい付けるもの等も出てきたのである。そういうわけで、エゾノサワアザミであった。このものは、莖葉がほとんど櫛状に深裂～全裂し、剛毛が多いのが特徴である。

エゾノサワアザミは低地や山地の湿原に生えるのが普通である。しかし、ここ幌尻岳の登山道は、湿地というより岩のごろごろした半ば乾いた山道である。チロロ岳や夕張岳などの比較的乾いた林道沿いや丘陵地でも、このものと似たエゾノサワアザミが見られるというが、この型のエゾノサワアザミは、別の種ではないかと考えている学者もおられるとのことである。梅沢俊著の「新北海道の花」には、カンラン岩地に多く出るアザミとある。北海道固有種である。

## 《 タカネイワヤナギ 》

タカネイワヤナギはヒダカミネアザミに似ていて、両種とも葉脈が表面に凹入し裏面に突出しているのが特徴である。

タカネイワヤナギは、幹が分枝して地表を這い、枝の立ち上がりが20cm～30cmになる雌雄異株の落葉低木である。葉は2cm～5cmの広楕円形で縁に細かい低い鋸歯があり、先は尖らない。質はやや厚く表面に目立つ皺があり、若い葉には両面に長い毛がある。苞は広楕円形で円頂で、子房の半長に達し長毛を密生する。花穂は径が5mm～8mmで長さは約5cmである。ヒダカミネヤナギとの相違点は、ヒダカミネヤナギの葉は腎円形～広楕円形でその基部は円形～心形である。一方、タカネイワヤナギの葉は円形～楕円形でその基部が円形～鋭形をしているのである。私が採集したヤナギの枝には葉の形が腎円形のものや基部が心形になっているものは一つも付けていなかったのであるが、花穂の付く側枝の長さや小花の苞の長さはヒダカミネヤナギのものと同じく変わるところがなく、ヒダカミネヤナギにごく近い種であった。梅沢俊著の「新北海道の花」には、日高山脈のものは亜種ヒダカミネヤナギとある。絶滅危惧種であり日高山脈固有種でもある。

この他、絶滅危惧種になっているカモメランやオオエゾデンダに、そして北海道固有種になっているコモチミコウモリやエゾミセバヤ等も確認することができた。因みに幌尻林道で見られる絶滅危惧種やヒダカ固有種等は下記の通りである。

### ○ 絶滅危惧種

エゾオトギリ、エゾノジャンジン、シラネアオイ、クシロワチガイソウ、カモメラン、イトヒキスゲ、イワヨモギ、ソラチコザクラ、ホザキシモツケ、タカネイワヤナギ、タチハコベ、オオエゾデンダ

- 日高山脈固有種  
ヒダカアザミ、エゾノジャニンジン、タカネイワヤナギ、エゾトウウチソウ  
※ アポイカラマツ(アポイ岳固有種になっているが、札幌林道にも自生)
- 日高準固有種(日高では普通に見られるが、他のところにも希に出るもの)  
アポイタヌキラン(胆振にも希産)、トカチトウキ(夕張にも希産)
- 北海道固有種  
イワヨモギ、コモチミミコウモリ、エゾノコンギク、エゾゴマナ、エゾトリカブト、エゾノサワアザミ、エゾミセバヤ
- 隔離分布種  
コゴメウツギ(本州・九州などにも生育しているが、北海道では日高だけに自生している)
- カンラン岩地に生育する植物  
アポイカラマツ、アポイタチツボスミレ、アポイタヌキラン、  
エゾノサワアザミ(高山の比較的温暖なところに生育している型のもの)

《 タカネノガリヤス 》

いね科の植物では、ミヤマドジョウツナギやタカネノガリヤスなど高地性のものも多くなり、オオトボシガラやアオカモジグサも確認できた。タカネノガリヤスは、ヒメノガリヤスと混じって生え、また様形もよく似ているので現地ではなかなか見分けにくい。相違点は下記の通りである。

	稈脚の鱗片	葉 鞘	護穎の芒
タカネノガリヤス	硬質で光沢がある	無毛	芒は護穎より短い
ヒメノガリヤス	膜質で光沢がない	上端には環状に短毛がある	芒は護穎よりやや長い

シダ類では、ニオイシダやイヌシダや絶滅危惧種のオオエゾデンダも点在する。また、ヒモカズラとコケシノブは苔状のシダで、如何せん苔類に通じていない私にはそのものが目の前にあっても目に入らないものであり、探し当てることのできないのであった。同行していただいた高橋誼先生に教えていただき、こんなシダもあるのかとただただ驚いた次第である。

2. 鶴川河口周辺にて

平取町には海がなく、また大きな湿地もないので、平取自然愛好会「ポリポリ」の活動日に海浜植物の観察会を計画し汐見の砂浜や鶴川の河口周辺に出かけていったのである。海岸の後方には勇払原野が広がり、浜辺の植物と湿地の植物の両方を合わせてみる事ができた。観察時期が7月の末だったので、見られる植物は少なかったが

エゾカワラナデシコやイソスミレ（花期は終わっていた）、シロヨモギ、テマリツメクサ、ハマヒルガオ、ハマニンニク等が群生していてとても感動的な光景であった。以下、新しく出会った植物である。

オニハマダイコン(躑)、オキジムシロ(躑)、ドクゼリ、エゾコゴメグサ、アオウシノケグサ、イヌイ、ヒメハリイ、ウキヤガラ、ヤラメスゲ、アカンカサスゲ

### 《 オキジムシロ 》

エゾノミツモトソウに似るが、全体的に小型で花も僅かに小さく、茎葉はエゾノミツモトソウが大きな3～5小葉からなるのに対してオキジムシロは7～11小葉である。従って小葉は前者が大きいのに対してオキジムシロはニンジン葉のように細くなっていることで区別できる。北海道では、まだ胆振にしか入っていないようである。ヨーロッパ原産。

### 《 アカンカサスゲ 》

アカンカサスゲは、ピロードスゲによく似るが違いは下記のとおりである。

	苞 葉	葉	果胞の大きさ
アカンカサスゲ	全てに鞘部がある	葉鞘・葉舌は有毛	有毛で4～5mm
ピロードスゲ	最下の外は無鞘	無毛	有毛で3～4mm

鶴川の砂浜の後方は湿地になっていて、カヤツリグサ科の植物も多く見られる。サンカクイーウキヤガラ群落を形成し、海岸湿地を好むイヌイやヒメハリイ、ヤラメスゲ等も群生してみられる。アカンカサスゲは湿地の縁の方に点在して見られ、果胞に毛があるのでうっかりしているとピロードスゲと見間違い易いが、葉鞘に毛があることと果胞がやや大きいのとで区別できる。

### 《 アオウシノケグサ 》

アオウシノケグサはウシノケグサの変種で、茎の上端近くに短い軟毛が生える型である。海岸の草地の中で株を作り多く見られ、淡い青灰色の葉を付けているので一際目立つ。図鑑には本州や九州では普通のウシノケグサで北海道では稀とあるが、ここでは以外に多く見られる。

その他、去年、平取町の看々（地名でカンカン）で見つきたいぐさ科のカラフトハナビゼキショウも見られ、いろいろな帰化植物が多く入っているようである。

### 3. 市街地周辺で

#### 《 コバノカキドオシとモミジバヒメオドリコソウ 》

最近、ホトケノザやヒメオドリコソウ、コバノカキドオシなどが目に付くようになってきている。

コバノカキドオシは、校庭の花壇の回りや公園の芝生やグリーンの中などで5～6月頃よく見られる。私はコバノカキドオシのことを、つい先ごろまで 刈り払い機でまめに刈り取られて大きくなれないでいるカキドオシだとばかりずっと思っていたのである。ある日、梅沢俊著の「新北海道の花」を何の気無しにめくっていた時、コバノカキドオシの項目にぶつかったのである。それを見て「もしや・・・」と思い、その小型のカキドオシを取ってきて調べてみたのであるが、それがコバノカキドオシを知った最初である。確かにカキドオシと比べて花を3～5個と多く（カキドオシは2～3こ）、花冠の長さも約1.5cmと小さいもの（カキドオシは2～2.5cm）であった。

また、モミジバヒメオドリコソウは、ヒメオドリコソウにしてはちょっと様子が違うので見て欲しいと持って来られたもので、葉の鋸歯の切れ込みが深くモミジの葉の形をしているものであった。堆肥の積んであるそばに生えていたとのことである。静内町では、ずっと前から帰化しているとの情報は得ていたが、見るのは初めてであった。

#### 《 カナビキソウ 》

カナビキソウは、平取自然愛好会「ボリボリ」の6月の観察会でファミリーランドに行ったとき見つけたもので、びゃくだん科の半寄生植物である。カナビキソウの高山型のをカマヤリソウとってアポイ岳にも自生しているという。カナビキソウはちょっと変わった花に見えたので、珍しい部類の植物かなと思っていたのであるが7月に鶴川の河口に行ったとき草地のあちこちに生えていて、また苫小牧の空き地でも見られたので、それほど珍しくはないんだなと思ったものである。

さて、今年は幌尻林道を重点に調査に入ったが、去年見ていなかった植物にも多く出合ったので一応の成果はあったと思う。ヒダカアザミについては新たな疑問点が出てきて興味をもって調べることができた。川に下りて川岸に沿っての調査もしたかったのであるが、切りたった絶壁が多く、流れも水量が多くて独りで調べるには地理的・時間的困難があり、安全面でも問題があり調査するまでには至らなかった。

また、鶴川の河口周辺の海浜植物は平取町では見られないものが多く、楽しい観察会となった。来年は、春から継続して調べに行きたいなあと思いが騒ぐのである。

(2011.12.3)

## アメリカ合衆国への旅のお勧め〔第2回〕

川田 貞家 記

前号で「グランドサークルのコース」でメサベルデ国立公園（以下NP. =National Park）迄をお話致しましたが、そこから北西に約50マイル(80km)で「ユタ州」に入ります。そこからハイウェイ491⇒191で約71マイル(113.6km)で「モアブ」の町に着きます。この町は「アーチーズNP.」「キャニオンランズNP.」（グランドキャニオンNP. ではありません）の宿泊基地です。

モーターが40軒程あります。ここでは、3泊はしたいものです。「アーチーズNP.」には主に風が削ってできた「穴のあいた岩」（アーチ状が多い）約1500あります。その中でも車で回れる主な岩は15所程ですがユタ州のシンボルとなっている「デリケートアーチ」是非行きたい所です。但しここに行くには山道を約1時間歩かないと行けません。必ず行く事をお勧めいたします。

この辺り一帯は赤い砂岩ですが夕陽が当たると更に赤くなりとても美しいので日没時間を確認して2時間前位にホテルを出発すると良いです。（曇りの場合は翌日にします）2日目はそこ以外をゆっくり回ります。「キャニオンズランズNP.」は主にトレイル向きなので省略しても良いですがここに行く途中に「デッドホースポイント国立公園（以下NM.）」には是非寄りたいものです。ここは「コロラド川がUターン」している所を崖の上から眺めますがグランドキャニオンよりもキャニオンを広く見渡せます。アメリカの観光地は殆どが夕陽を見る事が多いのですが、ここは朝日が昇る時に赤く染まるので日の出の時に行くのがお勧めです。

近くに「ルッキング・グラスロック」「ニードルズ・オーバーロック」「ウイルソンアーチ」等も見どころです。ユタ州には他に「キャピト・ルーフNP.」と「ブライスカニオンNP」と「ザイオンNP.」がコース上にあるので全て寄る事をお勧め致します。

特にザイオンNP. は下からそそり立つ崖を眺める景色です（グランドキャニオン・デッドホースポイントは崖の上から眺める景色です）

ユタ州を出るとネバダ州にはいります。暫く都会から遠ざかっていたので、ここでラスベガスの町に宿泊します。ここはアメリカでも特殊な町で町中がカジノです。大型ホテルの1階は全てカジノです。従ってカジノのあるホテルの駐車場はどこでも無料です。20年位前はカジノは社交的な雰囲気でしたが最近ではホテルの数も収容人数も急増して今や社交場と言うよりは家族で楽しむディズニーランド的カジノの町になりました。素人には、ルーレットとスロットルマシーンが、適当と思われれます。（勿論、ポーカー・ブラックジャック・バカラ等もありますが）特にスロットルマシーンは空港のロビー・土産店・等いたるところに設置されていてラスベガスを演出しています。又、ラスベガスでしか見ることのできない大きなショーも幾つかあります。代表的なものがホテル・ベラッジオの水のショー「Q」とホテルMGMに火のショー「KA」です。二つとも連日満席状態なので事前にインターネット等で予約購入をお勧めします。

ホテルMGMはラスベガスで最大のホテルで客室が8,000室もあるのでホテル内で迷ってしまいます。都会の町を楽しんだ後、再度、国立公園巡りにでかけます。ラスベガスから西にむかって、カルフォルニア州に入ると「デスヴァレーNP. (死の谷)」があります。名前の如くこの辺り一帯が何も無い砂漠の低地です。見逃せないポイントは「バッドウォーター」（ここはアメリカで最も低い所で海拔マイナス85.5mです。辺り一面が真っ白な大塩原です。

もう一つのポイントが「デヴィルズゴルフコース」です。ここは一面凸凹の砂と岩塩が混ざった平地でこんなところでゴルフができるのは悪魔しかいないとの事の様です。

死の谷を出て、西に進むと、今度は緑の国立公園です。ここはシエラネヴァダ山脈があり、雪が積もるので植物が育つのです。そのまえに一寸寄り道をして「モハベ(Mojave)」の小さな町に寄ると、ここにはなんと5,000基の風力発電機(ウインドパワー)が山の上に延々と設置されています。（日本は全国で約1,000基位で宗谷岬には50基程設置されています）

次に「セコイヤNP.」に入ります。ここにはアメリカ最大の樹木メタセコイヤが生育しています中でも現在見る事のできる最大のメタセコイヤには「ジェネラル・シャーマン・ツリー」の名前が

つけられています。(樹齢推定2300~2700年・高さ83.8m・根元の周囲31.3m・重さ推定1385t)昔はくり抜かれた木の真ん中を車が通っている写真がありますが現在はありません。雪の無い時は柵がしてあって木に触れる事はできませんが3月末位迄の積雪がある時は木に触れることが可能ですが、積雪の為車が通れない事もあるので5月中旬から6月がお勧めです。

背の高さではサンフランシスコの北にあるレッドウッドNP.の「コースト・レッドウッド」は高さ100mを越す木がありますが、あまり広くなく見どころとしてはセコイヤNP.をお勧め致しますさらに4時間程北に進むと「ヨセミテNP.」に着きます。ここでの見どころは大きな一枚岩の「エルキャピタン」と一枚岩が氷河で半分になった「ハーフドーム」(ここはロッククライミングのメッカで日本人も沢山登る様です。登るには3日位かかる様です。上記のザイオンNP.もロッククライマーが岩に張りついているのが見られます。もう一つの見どころが落差の大きな滝です。世界で落差の最大の滝はベネズエラの「エンジェル滝」で落差が980mとの事ですが私は見ていません。3番目が「ヨセミテ滝」で739m,4番目が「センチネル滝」610m,5番目が「スノークリーク滝」609m,10番目が「リボン滝」と10位迄の4つの滝があります。これらの滝は雪解け水の滝なので4月末から6月中旬迄が見どころです1度9月に行った時には全く水が無く「アメリカの滝は空気の滝ですか?」とジョークを言ったりしました。昨年一昨年も5月始めに行ったので迫力満点でした。アメリカで有名な「ナイアガラ」の滝は河幅320m落差58mで隣のカナダ滝は河幅675m落差が56mなので落てくる水の迫力はヨセミテ滝にかないません。

グランドサークルの国立公園巡りはこの辺で終わり、サンフランシスコの南の芸術家が集まっている「カーメル」の町に1泊するのがお勧めです。又、ワイン好きの方にはサンフランシスコの北の「ナバヴァレー」のワイナリーに寄るのも良いです。この辺りはナバヴァレーを中心として「ソノマ」等一大ワイン畑とワイナリーが沢山あります。現地のワイナリーガイドブック「The Preiser Key to Napa Valley」に記載されているワイナリーが643もあります。又レストラン(Dining)が176軒記載されていて和食の店も5軒あります。カルフォルニヤワインで日本で有名なのは、「オーパスワン」「コッポラー」「ロバートモンダビ」等ですが、少し高価ですがオーパスワンがお勧めです。上記ワイナリーでは試飲を含む見学コースも有ります。オーパスワンの試飲は一杯が35\$もしました。

サンフランシスコの町を観光した後帰国の途に着きます。

この他の主な観光地はニューメキシコ州のシャレタ町「サンタフェ」・10万匹のコーモリが夕方飛び立つ「カールスバッド鍾乳洞」・延々と真っ白い砂が続く「ホワイトサンズNM.」・アメリカ最南端の砂州の島「キーウエスト」・コロラド州コロラドスプリングス郊外の車で登れる最高峰の「バイクスピーク・14,110ft(4,300m)」・サウスダコタ州マウントラッシュモアの岩山に4人の大統領「ワシントン」(顔の長さ18m)「ジェファーソン」「リンカーン」「ルーズベルト」・ワイミング州のイエローストーンNP.ではバイソン=バッファロー・ムース(ヘラ鹿)・エルク・グリズリー(熊)・オオカミ・白頭鷲等の沢山の動物たちと沢山の間欠泉を見ることができます。イエローストーンの南のグランドテイトンNP.では美しい山々と湖が楽しめます。アラスカのフェアバンクス町では驚異の自然現象「オーロラ」を見る事もできます。又アメリカ最大の町「ニューヨーク」ではミュージカル・オペラ・ジャズ・美術館・一流ブランド商品・等なんでもありの町。まだまだ沢山の観光地もあります。アメリカはガソリンスタンド(コンビニを兼ねています)コンビニ(7イレブンが沢山あります)・スーパーマーケット(売り場面積が目茶苦茶大きい)の一部も24時間営業で旅人には便利です。ホテルも中西部の町ではモーテル(ラブホテルではありません)が2人部屋で50ドルから80ドル位で簡単な朝食付きが殆どです(1人でも同じ料金が基本ですが、たまに1人だと2\$位安いモーテルもあります)

言葉の事も片言の英語(単語を並べるだけで)宿泊・買物などほとんど、なんとかなります。是非広大なアメリカに一度行って下さい。尚、具体的な日程作りには別途お手伝い致します。

完

## 身近な樹木のはなしあれこれ

2013. 8. 3

文と絵 熊野 美子

### オニグルミ

森のあちこちに生え大高木になります。木目が美しく加工が容易なので建築材や家財として使用されます。ライフル銃の銃床としては最高級です。樹皮からは黒色の染料が採れます。

冬芽は裸芽で毛が沢山生え、乾燥と寒さから身を守ります。葉はベトベトします。

これに対し、サワグルミの方は冬芽は早く芽鱗を落とす半裸芽で、毛は少なく葉もベトベトしません。沢浴いに生育する木なので乾燥には関係がないようです。

クルミの実始終揉んでいると中風よけになると昔から言われています。健康器具のはしりでしょうか？

### ミズナラ

ナラは欧米では森の王様で神聖なものとされてきました。北海道のものには材に多量の水分を含み、燃えにくいのでミズナラと呼ばれます。

材は堅くて重いので、伐るにも運ぶにも大変でした。北海道では開拓の邪魔になるのでほとんど焼き尽くしましたが、残った大木は各地で老齢木として大切にされています。津別と東藻琴の国有林は遺伝子の保存林として指定されています。

昨年は堅果（どんぐり）が生り年で、今春の森の中では沢山の1年生木が観察されました。どれもどんぐりを付けたままでした。このどんぐりは何時まで付いているのか調べたところ、発芽から秋ぐらいいまじか栄養がないので、その後はしぼんでしまうそうです。

（森林総研の話）

#### 〈上胚軸休眠〉

ミズナラのどんぐりは、地面に落下したものでも枝から採ったものでもビニール袋に入れておくと水蒸気が出てきます。呼吸しているのです。机の上に置きっぱなしのものは枯死します。実った秋に発根し、そのまま冬越し翌年の春に発芽します。これが上胚軸休眠です。

この現象の訳は

- ・どんぐりが転がらない。
- ・越冬中でも根から水分を吸うことが出来、春一番に本葉を持ち上げいち早く光合成をスタートさせることが出来る。

### ナナカマド

道内の市町村指定の木種の中で最も多い(平成5年では34箇所。)

花言葉が「慎重」「用心」であることから、交通安全祈願の木として道沿いによく植えられます。冬も赤い果実を楽しめます。材は硬く、工具の柄、車軸等に使われます。備長炭として有名なのはウバメガシですが、ナナカマドの炭も極上品です。

和名の由来は

- ・七回かまどに入れても燃えにくい。
- ・材を炭にするのに7日間かかる。
- ・この材で作った食器は7世代使える。

等とされています。

ナナカマドとアズキナシが交雑したカワシロナナカマドもあります。

### シナノキ

北海道にこの仲間はシナノキ、オオバボダイジュ、モイワボダイジュ、3種があります。

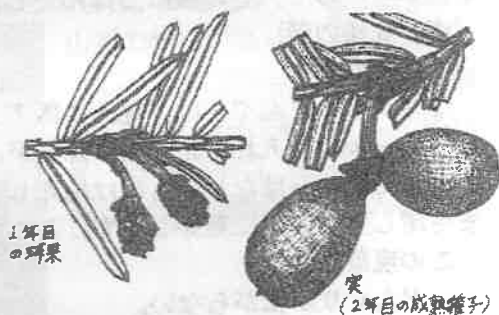
へら状の包葉が特徴で、花は黄緑色で多数付きさわやかな香りが初夏の森に広がり、蜂蜜源です。アイヌの人々はこの樹木から繊維を取り布や縄にして使用してきました。開拓時代は蚊帳(かや)を作りました。アイヌ語で「シナ」とは結ぶ、くくる、縛るという意味です。現在でもアイスクャンデーの棒、楊子、薄皮、鉛筆、割り箸として身近なものからベニヤ板、彫刻材として活用されています。材質がよく刃物を傷めないといわれ、北海道土産のクマの木彫りに使われていますが、木彫りの極上品はイヌエンジュです。

このクマの木彫りは、八雲の徳川農場主徳川義親がスイスから持ち帰ったものを農閑期にまねて彫ったのが始まりです。クマと密接な生活をしてきたアイヌの人々がこれを見て、野生のクマの姿を思い思いに動きを捉えて彫ったものが北海道の観光土産品となりました。

### ハイヌガヤ

イチイに似ているが別物でイヌガヤ科である。球果植物の中では著しく変体し多肉果状となりました。図にあるとおりです。

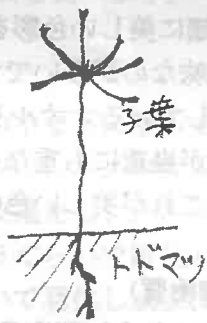
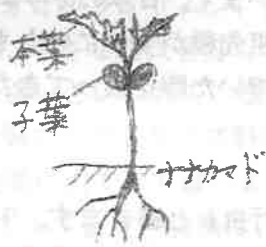
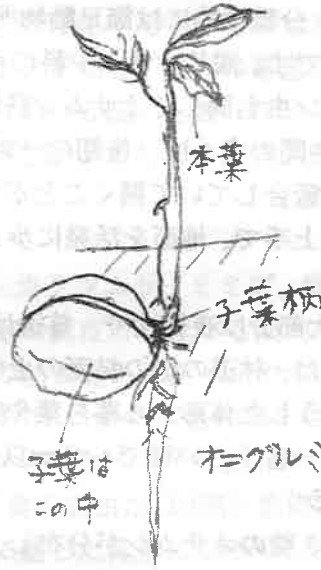
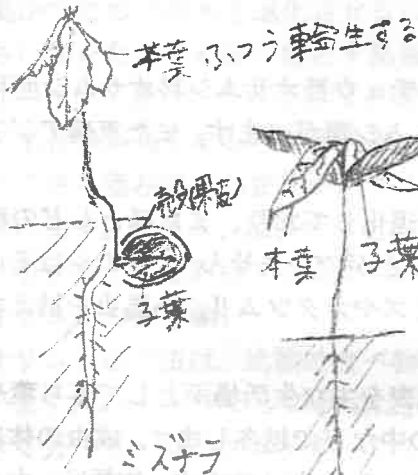
林床に生える低木なので風散布が期待できません。甘い外種皮(多肉果状)で動物散布へと変化しました。



参考文献:「植物で遊ぼうシリーズ」、「植物園だより」、「木と動物の森づくり」(斎藤新一郎著)



身近な樹木の1年生の木



### (オサムシは甲虫の仲間)

オサムシは、分類学的には節足動物門昆虫綱コンチュウ目オサムシ科オサムシ亜科に属する 1 グループです。同じオサムシ科の甲虫にはゴミムシ類がいます。また東南アジアに生息するバイオリン虫も同じくオサムシ科に属します。

オサムシの仲間の多くは、後翅の一对二枚の翅が退化しており、またほとんどの種は左右 2 枚の上翅は癒合して開くことができず飛ぶことができません。オサムシはそのぶん歩くのが早くて上手で、地面を活発に歩き回り、ミミズやカタツムリ、小昆虫を捕えて食べます。

オサムシの大部分は夜行性で、普通は、林内の地表を主な生活場所として落ち葉や石の下などに住み冬は、林道の崖の斜面の土の中や朽木の中などで越冬します。成虫の体はやや平べったく、こうした体形から落ち葉や石の下に潜りこみやすいのです。体長は、大きい種では 6 cm を超え一番小さい種でも 2 cm 以下は少ないようです。

### (日本のオサムシ)

日本には、43 種のオサムシが分布し、そのうち 32 種が日本の固有種であり、これらの種は 100 以上の亜種に別れています。日本のオサムシの起源は、大きく 2 タイプに分かれ、大陸から日本が分離したときに祖先種がすでにいたものと、氷河期の始まった 200 万年前から後に大陸と日本列島を結んでいた陸を渡ってきたものがあります。又北海道には 17 種が生息しています。

### (オサムシの名前のいわれ)

オサムシは、漢字で「歩行虫」と書きます。中国では今でもこのように書きます。これは、地表を素早く歩き回って生活する習慣にちなんだものです。和名ではなぜ「オサムシ」と言うのかその語源はわかっていません。体形が紡錘型で機織に使う箆(おさ)に似ているからだという説もあります。

### (歩く宝石と呼ばれるのは何故か)

オサムシは、飛ばない昆虫で翅に美しい色彩を持っているため歩く宝石といわれています。日本に住んでいる種は、翅が地味なのが多いですが体全体が青色、銅色、緑色に輝く美しい色彩の種います。北海道に生息しているオオルリオサムシやアイヌキンオサムシがそうです。

この色彩は、翅の内部の構造が幾重にも重なって出来ていて、その薄い膜を透って光が乱反射するようになっていきます。これが美しい色の源で、こうした構造によって作られる色を構造色と呼んでいます。

### (外敵から身を守るための防御物質)

オサムシは、外敵から身を守るために秘密兵器を持っています。オサムシの天敵は、カエル、キツネ、イタチ等ですが、こうした敵から攻撃されると腹部の第 8 背板にある開口する一对の防御腺から強酸性の液体を分泌します。

### (オサムシは何故飛ばなくなったか)

オサムシが飛ばなくなったのは幾つもの要因があります。第一に、飛ぶための後翅やそれを動かすための筋肉を退化させるのと引き換えに、産卵能力を高めているといわれています。小さい卵をたくさん産み落とす昆虫では、産み落とされた卵の生存確率が低下すると考えられています。逆に、大きな卵ほど発育が進んで子孫を生み出すことができることになり、子供の生存率が高くなるといわれています。蝶やトンボなど、飛翔の得意な昆虫は、小さい卵をたくさん産み落としますが、オサムシは大きな卵(5mm)を数(5~7個)を少なく丁寧に産みます。オサムシは、飛ぶための後翅やそれを動かすための筋肉が退化しているが、それと引き換えに産卵能力を高めているようです。

### (オサムシの食べ物)

オサムシの成虫は、比較的食べ物の幅が広く、カタツムリ、ミミズ、蝶や蛾の幼虫を食べています。また、オサムシの幼虫は、種ごとに特定の餌だけを食べる傾向があり、タイプは、大きく分けて、カタツムリ食、ミミズ食、昆虫の幼虫食の3タイプです。

カタツムリ食は、日本固有のマイマイカブリ等で、口から茶色の消化液を出してカタツムリの肉を溶かし食べるようです。幼虫もカタツムリを食べて育ちますが、カタツムリを食べないとうまく蛹化できないそうです。カタツムリ食の成虫は、頭部と胸部が細くなっており、カタツムリの殻の中に頭を突っ込んで食べるのに適した体形になっています。幼虫の時代にカタツムリを食べる種は、このほかにオオルリオサムシ、アイヌキンオサムシがいます。北海道に生息しているセダカオサムシは、小さな陸貝を好んで食べるようです。世界のオサムシでは、カタツムリ食の種がもっとも多いといわれています。

ミミズ食は、エゾアカガネオサムシ等で、フトミミズ科の大形のミミズで、普段、落ち葉の下で生活していますが夜の間だけ地表に出てきて這いまわることもあり、そこをオサムシに捕食されます。これらの種の幼虫もミミズを食べ幼虫は、大顎を大きく広げることができ、ミミズを見つけると大顎をいっぱい広げ胴体に噛みつき同時に毒液を注入し、その後体液を吸います。日本のオサムシでは、ミミズ食が約半数を占めています。

昆虫の幼虫食は、カタビロオサムシの仲間に見られ、この仲間は数少ない飛ぶことのできる種で、主に、木の上にいる蝶や蛾の幼虫を食べます。

### (繁殖と越冬)

#### 春繁殖型—春に繁殖して成虫で越冬

このタイプは、成虫は、土の中や朽木の中などに潜って穴蔵をつくり、その中で秋から冬の間じっとしています。エゾマイマイカブリ、エゾアカガネオサムシなどがいます。越冬を終えたオサムシは、4月から7月にかけて交尾をし、メスは土の中にお腹の先を突っ込んで一つずつ卵を産んでいきます。卵は、10日ぐらいで孵化し幼虫は、餌を食べ脱皮して蛹になります。蛹は、10日ばかりじっとして羽化し成虫になります。卵から生まれてから2カ月ほどかかります。

#### 秋繁殖型—秋に繁殖して幼虫で越冬

このタイプは、春繁殖型と対照的で秋に繁殖をおこない、卵が生まれ幼虫となり越冬します。セダカオサムシ、アイヌキンオサムシなどがいます。5月から7月に、新成虫が生まれ+

分に餌をとり栄養を蓄えると、ふたたび土の中に潜りこんで夏の間は活動を止め仮眠をします。9月になり朝晩が涼しくなる頃に活動を再開し交尾し産卵をします。オサムシの成虫は、主に夜の間に活動しますが、特に秋繁殖のオサムシは、完全な夜行性といってもよく昼間に活動することはあまりありません。しかし、春繁殖型のオサムシは、特に春から初夏には昼も活動し、私たちの目にふれることも多いようです。

#### (日本に固有のマイマイカブリ)

マイマイカブリは、日本のみで生息する固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布しています。このように、日本のほぼ全域に分布している固有種のオサムシは他にいません。マイマイカブリの体形は、世界のオサムシのなかでも特異で、長く伸びた頭部は、好んで食べるマイマイの奥に深く突っ込んで中の身を食べるのに適しています。マイマイカブリの語源は、マイマイの殻に頭を突っ込んで食べる姿が殻をかぶったように見えることに由来します。琵琶虫という呼び名がありますが、これは形が琵琶状であることからきています。また三重県ではマイマイカブリをカラスノババと呼んだそうで、これはカラスの糞という意味だと考えられています。

#### (野幌森林公園のオサムシ)

昭和47年から48年にかけて、野幌森林公園で実施された昆虫調査書Ⅰ-Ⅲ(坂本与一氏他)によると甲虫類は、66科588種で、オサムシ科は、セダカオサムシ、エゾカタビロオサムシ、アカガネオサムシ、ヒメクロオサムシ、エゾクロナガオサムシ、オオルリオサムシ、ツノヒゲゴミムシ、カワラゴミムシの8種が生息していると報告されています。

#### (アライグマとオサムシ)

平成13年に野幌森林公園でアライグマの食べていた節足動物調査(堀氏、的場氏)が実施されました。実際に捕えられたアライグマの消化内容物から確認された一番多いグループは、オサムシだったそうです。また公園内のピットフォールトラップ調査では、この森のオサムシ科甲虫は、多い順に、コクロツヤヒラタゴミムシ、イシカリクロナガゴミムシ、オオクロツヤヒラタゴミムシだったそうです。アライグマが捕食していたのはエゾマイマイカブリ、ヒメクロオサムシ、オオルリオサムシの順だったそうです。このことから、アライグマは地面を徘徊しているオサムシをランダムに捕食しているのではなく、綺麗な大型のオサムシを好んで捕食する傾向があると報告されています。

今後、移入種のアライグマの数が増えると野幌森林公園のような孤立する林環境では、飛んで移動できないエゾマイマイカブリやオオルリオサムシ等は、逃げ場がなく絶滅の危機に瀕するといわれています。

札幌近郊に生息するオサムシの分布状況、繁殖型、越冬態、食性

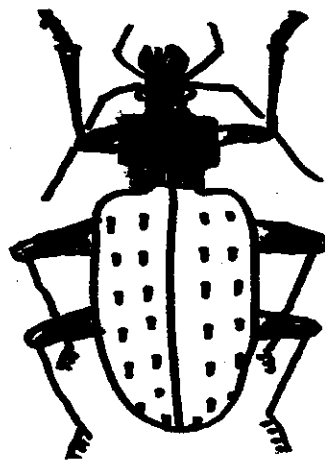
種 類	分 布				繁殖型	越冬態	食性
	九州	四国	本州	北海道			
アオカタビロオサムシ			○	○	春	成虫	昆虫
エゾカタビロオサムシ	○	○	○	○	春	成虫	昆虫
エゾアカガネオサムシ				○	春	成虫	ミミズ
ヒメクロオサムシ			○	○	秋	幼虫	昆虫
エゾマイマイカブリ				○	春	成虫(幼虫)	カタツムリ
セダカオサムシ			○	○	秋	幼虫	カタツムリ
アイヌキンオサムシ				○	秋	幼虫	カタツムリ
オオルリオサムシ				○	春	成虫幼虫	カタツムリ

★ 繁殖型は幼虫越冬のないものを「春」繁殖型、あるものを「秋」繁殖型とした

参考文献 「オサムシ」「森へのいざない」



エゾマイマイカブリ



エゾカタビロオサムシ



エゾアカガネオサムシ

# 「竹」

伊藤 秀平

タケ(竹)とは広義には、イネ目イネ科タケ亜科のうち木本(木)のように茎が木質化する種の総称である。しかし、通常の木本と異なり二次肥大成長はせず、これは草本の特徴である。このため、タケが草本か木本かは意見が分かれる。ただし、タケの近縁種は全て草本で木本は存在しないので、近縁種に限った話題では、近縁の完全な草本と対比してタケは木本とされることが多い。

分類学的には従来、タケ連にまとめられていた。しかし単系統でないことが判明し分割が提案されている。広義のタケは、その生育型から狭義のタケ、ササ(笹)、バンブーの3つに分けられる。

京大名誉教授 上田弘一郎(世界の竹博士)は「竹は木のように木でなく、草のように草でなく、竹は竹だ!」と力説されていた。専門家でも維管束植物を草か木に2分類するような定義には策定・同意し、  
と言われている。

## 概要

タケは気候が温暖で温潤な地域に分布し、アジアの温帯・熱帯地域に多いがササは寒冷地にも自生する。タケ、ササの分布は北は樺太から南はオーストラリアの北部、西インド亜大陸からヒマラヤ地域、またはアフリカ中部にも及ぶ。北アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカの大部分には見られない。

通常、地下茎を広げる事によって生息域を広げる。一部のタケ類は周期的に開花し一斉に枯れる事が知られている。その周期は極めて長く、マダケの場合は120年周期であると推定されている。しかし、まだ周期が分かっている種類も多い(日本におけるモウソウチクの例では、種をまいてから67年後に一斉に開花・枯死した例が2例(1912年-1979年・1930年-1997年)記録されている。

タケの種類によって開花周期に幅が見られるが、一般的にはおおよそ60年から120年周期であると考  
えられている。

タケ類は成長力が強く、ピークの時は1日で1メートル以上成長する。竹林の近くにある民家の中に竹が侵入する(タケノコが生える)被害もある。地下茎が地面を広く覆うことからがけ崩れには強いが、逆に強風、地滑り、病気などには弱く放置された竹林では地滑りの発生が多いという研究もある。事実、放置竹林による地滑りの事例がいくつも報告されており、問題が指摘されている。また放置竹林によって山地が覆われ、元々植生していた広葉樹や針葉樹の光合成が妨げられ、結果として森林の減少を招くという問題も起こっており、各地で対策が講じられている。

乾燥が十分されたものは硬さと柔軟性を備えており、さまざまな素材として利用される。その繊維も利用して紙も作られている。竹酢液や竹炭としても利用されるほか、飼料、建材工芸材料などとしても利用されている。放置竹林の問題も、これらの素材としての活用を求め様々な研究、試行錯誤が行われている。

また、食材としては若いものを筍として食べるほか、ジャイアントパンダのように葉を食料の主食として利用する動物もいる。

モウソウチクを除く種の多くは、その地域でしか生育しないことが多いが、その理由は不明である。

## 竹と笹とバンブーの違い

### 地下茎の有無

地下茎で生育繁殖するタケ、ササと異なり、バンブーは分けつ（分蘗）によって株立ちになる。

### 竹皮の着生

タケは生育後落下するが、ササは生育後も着生している。

### 葉の形態

タケは格子目があるが、ササにはそれが無く縦に伸びる平行脈である。

### 開 花

タケは約120年周期、ササは40年～60年周期でどちらも開花後には枯死する。

### 分 布

日本ではタケは青森から九州だが、ほとんどは帰化と見られる。ササは北海道や高山地帯にも自生する。

一般的には丈の低いものが笹竹の略とされる。名前に〇〇ダケ・〇〇ザサ・〇〇チクとついても実際のタケ・ササの判断とは違う場合がある。ただし、植物学的には「成長すると稈鞘(筍の皮)が落ちるのがタケ、残って稈(タケ、ササにおける「茎」)を包むのが笹」とする。しかし、オカメザサのように膝丈ほどのタケやメダケのような背の高いササもある事になる。バンブーは熱帯地方に生息し、外見がタケに似ているものの、地下茎が横に這わず株立ちになる。

ちなみに、日本に見られるタケの多くは帰化植物と考えられ、一部種類には日本野生説もあるがほとんどが中国原産である。ササは日本産のものが多くあり、地方異変も数多

## 主な種

タケ類の種は、世界で600種とも1200種とも言われている。日本には150種、あるいは600種あると言われている(いずれも学説によって異なる)。以下は日本に生育するタケ類のうち代表的なものです。

- |         |         |                 |        |         |
|---------|---------|-----------------|--------|---------|
| ■マダケ    | ■モウソウチク | ■ハチク            | ■ホテイチク | ■キッコウチク |
| ■ホウライチク | ■ナリヒラダケ | ■トウチク           | ■シホウチク | ■カンチク   |
| ■ヤダケ    | ■メダケ    | ■ネマガリダケ (チシマザサ) |        |         |

参考資料 学研「植物図鑑」、インターネット

後期観察会の話題『木』

「木」、「樹」とは、一本で生えているのは立ち木、何本も生えているものは木立草に対し立っているもので硬い幹をもち幾本もの枝があり、地面に根を張り成長し幹は木質化し 太く成長する。枝の先に葉と芽を付け花を咲かせ 主に種子をもって繁殖する。地上部の茎が木質化している植物をいう。

今日の話の中「木」は、私たちの生活の身近にある木材としての木の働きを考えてみます。

- ◎ストローを束ねたように衝撃を和らげてくれる 自然のクッション、暖かさ
  - ◎香りでリラックス 自然のアロマ
  - ◎味覚の贈り物
  - ◎細胞の隙間から音の振動をまるやかに！
  - ◎資源としての利用
  - ◎全体から森としての働き
  - ◎先人から伝わる知恵
- 振り返ってみよう木の文化の国

今年は国連が定めた国際森林年です。

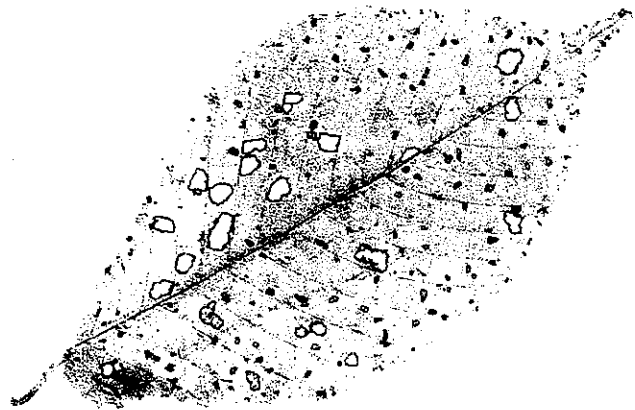
日本の国土面積の67%が森林、北海道は土地面積の71%となるそうです。

しかし 世界全体では北海道の1, 3倍の森林が毎年減少 しています。

森林の働きは、木材生産、水源のかん養、土砂の流失の防止 他いろいろあります。

環境庁調べで 幹廻り 巨樹10メートル以上、巨木3メートル以上の木は

全国 55、798本 で見てみたいですね。





木には、散孔材 (サンコウザイ)..... 例) カバ、メープルなど  
環孔材 (カンコウザイ)..... 例) ナラなど があります。

木には、 硬い 重い 音が響く  
やわらかい 軽い  
水に強い ねぼりがある  
腐りにくい 虫に強い ..... の特長があります

◎木のクイズ (先人から学ぶ)

関係のあるのは? ○をつないでみよう!

- |        |   |   |         |
|--------|---|---|---------|
| アオダモ   | ○ | ○ | 下駄の歯    |
| キハダ    | ○ | ○ | 飛鳥時代の仏像 |
| アカエゾマツ | ○ | ○ | 胃の薬     |
| クリ     | ○ | ○ | 靴製造の木型  |
| アサダ    | ○ | ○ | バット     |
| シナ     | ○ | ○ | はちみつの蜜源 |
| イタヤカエデ | ○ | ○ | スキー板    |
| ナラ     | ○ | ○ | 枕木      |
| クスノキ   | ○ | ○ | 浮世絵の版木  |
| ホオ     | ○ | ○ | ピアノの響版  |
| カツラ    | ○ | ○ | 印の持ち手   |
| ヤマザクラ  | ○ | ○ | ウイスキーの樽 |

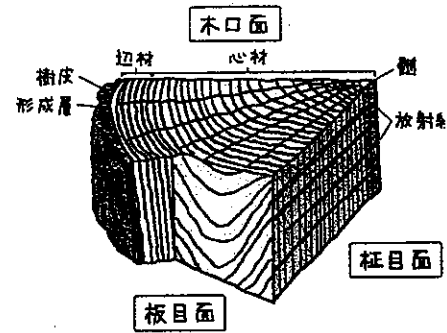
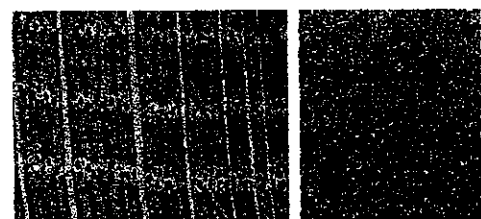


図2-4-1 樹幹の構造

出典:「林産学概論」川瀬 清 (北海道大学図書刊行)



I. 西岡水源池の鳥 (2011 年 11 月の探鳥資料)

カイツブリ、マガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、トビ、ヤマセミ、カワセミ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシブトガラスなど。 合計：24 種以上

II. 「留鳥」と「冬鳥」

Q 「留鳥」ってなに？

(答え) 北海道に 1 年中すんでいて、季節的に移動しない鳥のこと。

(スズメ、トビ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、カケス、ヤマセミ、ハシブトガラス、マガモ、カケス、キクイタダキなど)

Q 「冬鳥」ってなに？

(答え) 越冬するために北海道にやってくる渡り鳥のこと。秋に渡って来て冬を過ごし、春に北方へ渡って繁殖する。(ツグミ、キンクロハジロ、カワアイサなど)

III. 水辺の鳥

Q なぜ、秋や冬にはカモ類は、オスがいないの？

Q なぜ、この時期のカモ類のオスは、きれいではないの？

(答え) それは、オスが“繁殖羽”でなくなるから！

(参考資料) 「エプリクス」とは？

カモ類のオスは、繁殖期のあとに全身換羽が行われ、その羽は地味で、メスとよく似ている。この非繁殖の羽を「エクプリクス」と言う。渡来直後はほとんどがこれである。

Q カモ類の見分け方は？

(答え) 一つの方法として、“潜水するもの”と“潜水しないもの”で区別する！

(参考資料) 「潜水ガモ」と「淡水ガモ」とは？

1 「潜水ガモ」は、主に淡水でも海水でも生息し、水中に深くもぐって食物をとるもの。(キンクロハジロ、スズガモ、ホシハジロなど)

2 「淡水ガモ」は、主に淡水で生息し、水中に深くもぐらない。水中の浅いところで食物をとるもの。

(マガモ、ヒドリガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、ハシビロガモなど)

Q カモ類は何を食べてるの？

(答え) 主に、1 動物質の餌(魚など)を食べるもの 2 植物質の餌を食べるものに、分けられる。

(参考資料) 「潜水ガモ」は、主に動物質の餌(魚・貝など)を食べる。

「淡水ガモ」は、主に植物質の餌(水草など)を食べる。

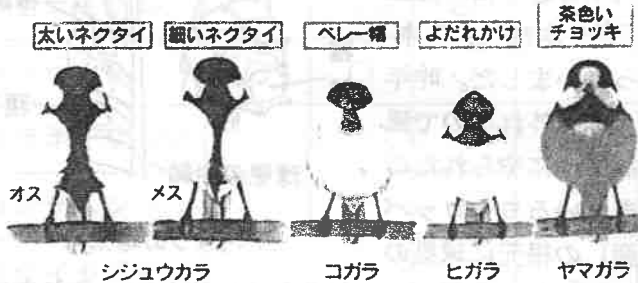
北海道ボランティア・レンジャー協議会「西岡水源池観察会」下見会資料(2)  
 (西岡水源池の鳥たち)

IV. 野山の鳥

① カラ類

Q シジュウカラの仲間を見分け方は？

(答え) 頭と胸に注目！ (資料参考)



Q なぜ、繁殖期以外には違ったカラ類が“群れ”で集まっているの？

(答え) 「混群」の方が生活するのに有効だから！

- 1 混群になっていると、他の種類をまねて普段とは違う食物を手に入れられるから。
- 2 他の種類の鳥が発見した敵から身を守ることができるから。

(参考資料) 「混群」とは？

春から夏に“つがい”で子育てをしたカラ類は、繁殖が終わると“群れ”をつくる。違った種類が混じって“群れ”となることがある。これを「混群」という。カラ類の他にエナガ、ゴジュウカラ、コガラ、キクイタダキ、メジロなどが加わることも多い。

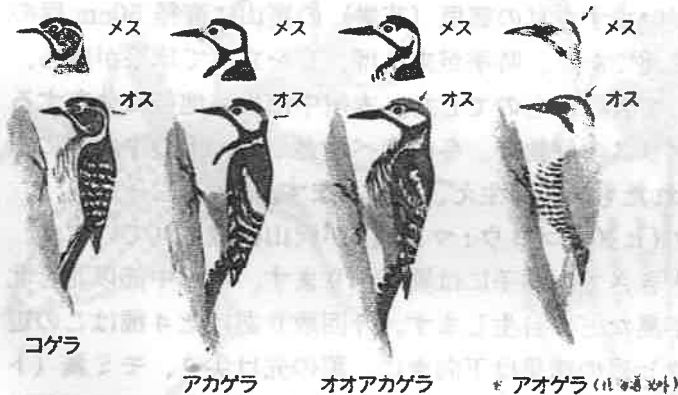
② キツツキ類

Q キツツキの仲間を見分け方は？

(答え) 頭と胸と背中に注目！

Q オスとメスの見分け方は？

(答え) 頭に注目！ (資料参考)



Q キツツキが木をつつく3つの目的はなに？

- (答え) 1 木の中にいる虫を捕るため。 2 巣穴、ねぐら穴をあけるため。  
 3 ドラミングのため。

## 球果のこと

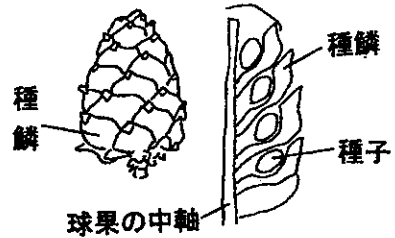
苫小牧市 谷口勇五郎

1月15日、北大研究林で観察会をしました。まず樹木園に進みました。入り口近くに、直径40cm程のヨーロッパトウヒが2本枯れ、1本には球果が幾つもぶら下がっていました。昨年あたりに枯れたのでしょう。林の外れなので風当たりが強く、弱り、虫や病原菌にやられたのでしょう。少し進むと、生きているヨーロッパトウヒ（トウヒ属：欧州原産）の根元に球果の中軸を残し先端に種鱗を少し残したものが2～3個落ちていました。参加者に聞くと「エゾリスが食べたもの」といい、「種鱗を噛み切り、間にある種子を食べた」という。「エビフライのような」とまで言いました。最近レベルが高いですね。オニグルミに比べれば美味しくないかもしれませんが、食べ物のない時季ではしかたがないでしょう。この木の球果は細長く15～20cmで、種子には翼があります。小枝が下がるのが特徴で、葉はアカエゾマツ（トウヒ属）より少し長く、断面はひし形、鉄道の防雪林として利用されているそうです。

少し進むと、北米原産の葉は一束3本のリギダマツ（マツ属）が数本植わっています。日本には葉が一束2本とか5本のマツが自生しているものの、3本のものはありません。その球果はクロマツぐらいの大きさと直径5～8cmあり、種鱗にとげがあります。

幌内川を渡ると、チョウセンゴヨウ（マツ属）が沢山植えてあります。球果は高丘森林公園で拾ったものを持参、長さ15cmもあり、ごろんとしています。種子はハイマツと同じように（他のマツ類は翼を持つ）翼がなく、子指の爪より少し長く、ころんとしています。私の郷里（花巻）の裏山に直径50cm程のチョウセンゴヨウが1本植えてあり、時季が来れば、音を立てて球果が落ち、種子をいり、金槌でつぶして食べたものでした。本州中部山岳地帯に分布するそうです。その種子はエゾリスの好物で、冬の食べ物として、土の中などに隠し（貯食）、時には食べ忘れたものが芽生え、生長します。

すぐ近くに、キタゴヨウ（ヒダカゴヨウ：マツ属）が沢山植栽されています。球果はクロマツぐらいの大きさと、種子には翼があります。本州中部以北と北海道では日高山系・渡島半島などに自生します。今回取りあげた4種はこの辺に自生していません。トウヒ属の球果は下向きに、葉の先は尖り、モミ属（トドマツなど）では、球果は上向きに付き、葉の先は凹形です。なお、マツ科にはマツ属・カラマツ属・トウヒ属・モミ属などがあります。



ハイマツの球果

## 機関紙【流水】の発刊にあたり

北海道ボランティアレンジャー協議会  
オホーツク支部長 和 泉 勇

新年あけましておめでとうございます。

会員の皆様には、健やかに新春をお迎えのこととお慶びを申し上げます。

この機関紙も本年度において第12号の発刊になり、支部結成20周年になります。

会員各位と関係機関のご支援の賜物と深く御礼申し上げます。

さて、昨年を振り返れば、3月11日学校にて執務中に起きた地震の脅威的な出来事が  
今も忘れる事が出来ません。当校では生徒が帰宅したあとで被害等はなく安堵しました。

また、地球規模で起きている「異常現象と災害」は切っても切れない共通課題でもある  
私たちボラ・レン会員の役割が多くあると思います。

今年も皆さん健康に留意され、支部の特殊性を生かし活動しましょう。

### 《 回 想 》

私の母親（ケサヨ、現在生きていたら130歳。私が一番下の六男）が福島県の会津若松藩出身のため、親戚等に安否の確認・電話連絡等をしたものの、連絡が取れないので4月3日に福島空港に向かった。降り立った時の災害の匂いと目に映る光景は、まさに地獄の如くであった。

一般人の立ち入りが限定されていたが、何とか面会する事ができ、親戚一同は高台に避難、無事であることが確認された。

## 【 オホーツク支部に学ぶ 】

北海道ボランティア協議会  
会長 春日 順 雄

「わらいあり 心ほぐれる支部研修  
“ 学び合いあり 語り合いあり ”

長距離駆けてオホーツク支部研修に参加するたびに、支部の皆さまとお会いすると疲れが吹っ飛んでしまいます。和泉支部長さん、法師人事務局長さん始め、皆さま方の持つ温かさなのでしょう。不思議にも年に何度もお会いしているような感じになります。

ちょっぴり堅い話ですが、人が生涯かけて追い求めるものとして「友情」・「信頼」と言うことがあります。太宰治の「走れ！メロス」の主題も「友情・信頼」でした。オホーツク支部に参加するたびに、「友情・信頼」を感じます。有難い事です。嬉しい事です。

会員所在は北見・網走・遠軽・斜里と広域です。この状況の中で一年一度の支部研修をバッチリ決める原動力は何だろう。それは、大いなる自然、自然の美しさに魅せられてと言うことでありましょう。毎回のスライドによる交流は魅力があります。学び合いあり、語り合いあり、楽しいものでした。法師人さん・佐野さんたちの見事なスライドとその説明が、毎回素晴らしい。説明には、見事に美しさイッパイ、楽しさイッパイの感情が込められていました。そして、それに対する問いかけとうなずきもいい。みんな自然好きです。刺激し合う、いい学び合いの場面です。

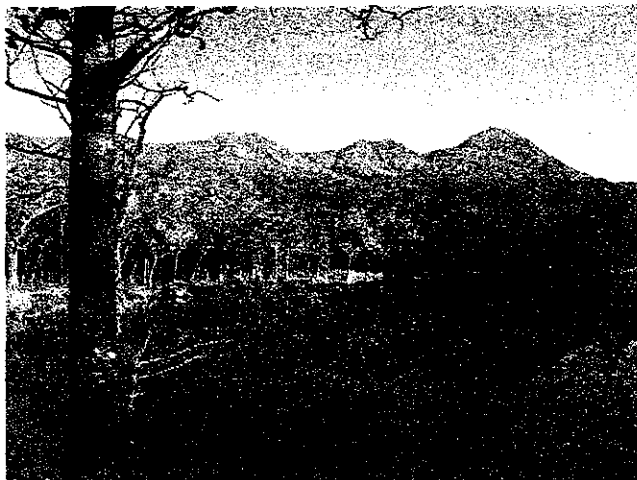
毎回セットされる研修もいい。心に残ります。嬉しい事です。元大学教授の話、関口さんのヒグマの話、昆虫館の話など、オホーツク支部の人達のネットワークの賜物と感じています。

オホーツク支部の皆さんは、地域に根ざしたものを持っていると感じます。遠軽の時でした。佐野さんの説明がとっても素敵でした。自然観察会の案内は、かくあるべしと言うほど、私たちの心を引き付けるものでした。教育委員会と社会教育に関わりを持っていますから実践的なんですね。昆虫館の研修には遠軽町の職員が説明に来られました。白滝の小栗さんに頼んだら、たちどころに遠軽町埋蔵文化センターと繋がってくれますし、地域に根ざすことは本当にうらやましい事です。ポラレン会員は自然が好きで、地域に溶け込み、地域に役立つのがいい。オホーツク支部の皆さんには、そんな香がします。

オホーツク支部は、いいところをイッパイ持っています。全道のポラレン会員に、この良さを紹介していきたいと思っています。さし当たって、今年の夏に誕生した十勝支部。道東の根釧にも案内を頼みましたから、オホーツク支部並みの広さです。十勝支部には、焦らず、楽しく、オホーツク支部のいい活動の形もあるんだからと紹介しています。準支部的な組織も旭川・富良野を中心に活動を始めようとしています。

そこにも同じく働きかけています。年に一回で、いいではないか、継続している内にきっと芽が出てくるよ。大きな夢も大事だが、小さい夢でもいい実践することが大事だから。などと.....。

オホーツク支部の活動の様子は、私にとって大変勉強になります。有難うございます。



知床五湖 第一湖より 知床連山を望む 写真提供：千葉 亮

当支部副支部長 遠軽町丸瀬布 佐野亮二氏

**「北海道産業貢献賞【林業関係功労者】」を受賞する！！**

当支部の会員である佐野亮二さんが、平成23年度北海道産業貢献賞（林業関係功労者）を受賞されました。

佐野さんは永年に亘り、遠軽地域の林業振興に貢献され、その功績が顕著であると認められたもので、今回の受賞となりました。

平成23年12月15日に札幌市において授与式がおこなわれました。この前年には、指導林家としての永年の山づくりや森林ボランティア活動が評価され、「林野庁長官賞」を受賞しております。今回2回目の受賞です。

おめでとうございます。

オホーツク支部としても、このような名誉ある賞を受けられた佐野さんが会員である事をととても誇りに思います。これからも健康にご留意され、当支部活動への助言と指導をお願いするものであります。

## 【 偶然の再会から 】

千葉 亮

年が明けて三年前、未だに私の氏名が道のボランティアレンジャー名簿に掲載されていると見えて、「瀟沸湖」の白鳥の生息調査の協力依頼文書が総合振興局（当時は網走支庁だった。）からいつものように来ました。

資格を取得しても、何の役にも立てず、何時かはお返しをしなければとの思いに苛まれていた処、丁度その土曜日は予定も用事もなく、初めて出かけてみました。ラムサール条約に登録された2年目の秋でした。会場で、バッタリと法師人さんと会い、色々と過去の出席時の事務局の対応の悪さや、形式だけのお役所仕事の中身を聞いたあと、指示に従い白鳥のカウント。やはりその時も、期待を裏切らない対応の不味さに、二人でウンザリしながら帰ってきました。



昨年の春、網走の床屋に初めて行った時、また法師人さんに仕事以外でお会いする機会があり、以前、仕事の合間に、ボラ・レンの資格取得が一緒だったことを覚えているかと聞かれた。数少ない自慢できる事として、人の顔と名前の一致しない私は、「覚えていません。」と正直にこたえた。恥ずかしいが、よほどのことが無い限り、覚えていないことが多く、随分と失礼をしていることも多いと反省はしていますが、これだけはどうしようもない。

その時、法師人さんからボラ・レン再加入のお誘いを受け、なぜか「分かりました。」と返答してしまった。年月と年齢と仕事の内容がそのように返答させたと思っています。

実は、知っている方もいらっしゃるのかと思いますが、オホーツク支部がまだ網走支部（北見支部だったかも知れない）として結成間もないころ、初代会長であった高橋会長のもと、私は支部会員として在籍していたことがありました。

3年間の在籍だと記憶していますが、何もできずに退会して心残りでした。当時から、ボラ・レンには多少の疑問を持ちながら、その時は若輩者（今でも皆さんから見ると同様でしょうが）の私が、「ボラ・レンかく在るもの！」等と意見を述べるような立場にはなく、そのことも原因で退会したように記憶しています。（若気の至りですね。）

そんなこんなで、今年記念すべき20年の年に復活するもの、何かの縁と考えていて、また、自然大好きの皆さんと、時間を共にできることを、楽しみにしています。



さて、前振りが長くなりすぎましたが、ここで自己紹介をさせていただきます。

私は、昭和31年6月に、日本で二番目、北海道で最初に鉄道が敷かれた、元の炭鉱町「三笠市」で生まれ、23歳の時に就職の関係から、“清里町”に永住することとなり、現在に至っています。現在、55歳。(若い!?)

職場は、清里町農業協同組合。20年間、畜産畑の専門職として働き、もともとは、家畜人工授精師と牛の受精卵移植を主たる業務としていました。仕事の話に興味を持たれた方には、今度機会があればお話ししたいと思います。(書くと長くなりすぎます。)

現在は、同じ営農部「経営課」に在籍し、農家組合員さんの財布番を仰せつかっています。営農集団の地区担当員や再建者対策を主に行う、「再建対策室」にも籍を置いています。

3年前に、もう一度大好きな自然と動物に関われる「野生動物リハビリテーター」と言う仕事と組織があることを知り、現在「北海道野生動物リハビリテーター」にも籍を置いています。余りにも知名度がなく、ボラ・レンのような支部組織もないので、地区のキーになっている家畜病院からの依頼がない限り、表立った役目はありませんが、早く言えば、傷ついた野生動物の、病院搬送までの応急措置や治療後の自然復帰までのお手伝いをする看護師です。(理学療養士も兼ねていますが)

主な趣味は、「釣り」!それも、フライフィッシングとルアーフィッシング。それ以外にも、下手の横好きで色々やってきました。カヌーなどもやります。

妻は1人、子供は1男2女の3人、孫が1人。現在は、妻と犬と猫で暮らしています。家は、夢であった、斜里川の側に居を構え、清里町で一番大きな公園に隣接したところに



住んでいます。

今は、すぐ横の木に“オジロワシ”や“オオワシ”が毎日来ており、知床の続き地という好条件を満喫しております。動物や魚、水棲昆虫などを得意分野としています。

これから、皆さんの植物に関する知識をご教授頂き、今年は久しぶりに、斜里岳登山もやりたいと思っております。

会員の方で、高山植物を観に山を登ることがありましたら、是非声をお掛け下さい。ご迷惑でしょうが、ご一緒させていただきます。

最後になりますが、佐野さんが私の入部を大変喜んでいただいた文章を投稿していただきました。嬉しい限りです。期待に応えられるか不安もありますが、一生懸命頑張りたいと思います。

私の名前は、普通は「リョウ」とか「アキラ」と音読みする方が多いと思いますが、私の場合は、訓読みの「マコト」と読みます。改めまして、よろしくお願いたします。

## 【 小さな村の挑戦、馬路村を訪ねて 】

網走市 法師人春輝

この度、仕事の関係でかねてより興味があった高知県安芸郡馬路村に行く機会を得ました。ユニークな発想のリーダーに賛同して一緒に邁進した人口わずか1,000人しかない高齢化の進んだこの村の挑戦をご紹介します。

高知市内から国道55号線を室戸岬へ向かうと三菱の礎を築いた岩崎弥太郎の生家である安芸市に着きます。更に海岸線を進むと安田町に入り、ほどなく左折すると四国山地の山懐、馬路村へと向う県道12号線につながります。県道とは言え急峻な山道を抜けて2時間15分ほどの道のり、ようやくの思いで到着です。

この村は昔からユズの木を植えていたと言いますが、生食では商売にはならず、ナス、ピーマン、キュウリ、ショウガなどの野菜によって生計を維持していたそうです。平地は殆ど無く、村の面積の96%は森林だと言います。人口1,000人ほどの山ばかりの村、広大な土地はある訳がなく、あるのは昔からどこの家にもある形の悪いユズ。これを活用しないでは無いと考え、ユズの実の加工・直売を始めたのです。

営林署を改修して作ったという事務所、直売所、パン工房、何軒かの民家が、師走の喧騒を忘れているかのように静かに佇んでいました。

今では全国に販売展開し売上32億円。小さな村にとって大きな収入源となったユズ、その結果、若い人の雇用までも生み出したのです。

富良野のニングルテラスを参考に作ったという雑木林を歩いていくと紅葉のモミジの奥に、漆喰壁と杉壁で作られた建物が見えました。ユズの加工施設とコールセンターです。内装も杉の木をふんだんに使っていて杉の香りがじつに落ち着きます。夢のある明るい建物、2階へ案内されると、オペレーターとして従事する20~30人ほどの若い女性たちの存在。歓迎を現す美女の微笑み。



山道の疲れも吹っ飛びました。

ここはかつての森林鉄道の跡も残っていて、四万十川にも劣らない清流があり、鮎など川魚や温泉もあり、自然がふんだんに多い。

安田川と民家

このような限界集落に近い山村であっても、そこに魅力があれば若い人達が  
どんどん寄って来る、雇用、観光、新たな産業と広がっていく。

日本は震災や経済の不振、高齢化など様々なマイナスの面ばかりが取り挙げら  
れています。しかし馬路村を訪ねてみると、もう年だからだとか、田舎で若い  
人が居ないからもうやっても無理だとか言っている人はいないと思います。

この村のプロモーションビデオの冒頭、お婆ちゃんが、「だぶりゅう〜だぶり  
ゅう〜どつと〜わいゆうすえっと〜どつと〜おうあある〜どつと〜ぜーびい」  
と半ば訛りながら出て来たのには、シャレにしてもこの村の連帯感がヒシヒシ  
伝わってきたことは私だけではないと思いました。一人一人が何か小さな事で  
も出来ると思ってやれば、皆の力が結集すれば大きな力が生まれる！！

還暦間近かの私も頑張らねばと。ボラレンの中にあっても何かしらやれること  
があるのではと思う次第です。遠くを見るよりもまずは足元を見て見逃してる事  
や忘れてる事



JA 馬路村事務所

は無いか、見直す事が大切であると。

本当に勉強になりました。

「感動を送る。それが私のめざす産直」と、T  
組合長の温かな話し方とは裏腹に奥底にみな  
ぎるパワーに圧倒され、初冬の山村を後にしま  
した。

最後に馬路村のポスターにあった文言を転載して終わらせて頂きます。平成  
24年も皆様方にとって良い年になります様ご祈念致します。

11月19日 柚子日和

ユズの収穫の季節

この週末には息子が孫をつれて戻ってくる。あてらあは、うれしゅうて  
うれしゅうて前の晩からねむれん。

ふとんをちゃんと干しちよかないかん。

食器はきれいにあったろうか。あの子らあは、ゆず寿しがすきやきねえ  
材料もいろいろ、かまえちょかな、いかなあね。

イノシシ肉は、まだ、あったろうか、ゆず酢も、どっしこかまえちょこう。  
こづかいもかまえちょこう。

おじいさんは、ゆずとりのハサミやら、手袋やらをかまえゆう。

明日からが、ゆずとり、やけんど、今日が一番せわしいねえ。

おばあちゃんの家は、前の晩、夜おそうまで、灯りがとまります。

(おわり)

## 【 怪奇なこと 】

小 栗 法 韶

- 私が子どもの頃、近所の子ども十数人で外遊びのグループが自然にできていた。このグループの男の子が突然のようにポックリと亡くなった。通夜の夕方、仲間数人で亡くなった子のことを話し合っていたとき、「アッ火の玉だッ」と押し殺したような声で指差す方をみると、地上を這うようにふあふあとピンポン玉くらいの火の玉が飛んでいるのがみえた。それが隣の遊び仲間グループの女の子の家の煙筒に吸い込まれるように消えた。

それから二・三日して、この家の女の子が亡くなった。

- 中学生の頃、新聞配達をしていた。その配達区域に病院の入院棟があった。ここに夕刊配達のために玄関に入ろうとして、ひょいっと上に目をやると外灯のように光る物体があり、外灯と思い気にも留めなだったが、翌日玄関入口で上を見ると、何も無く暗いだけであった。



- 親戚で危篤に陥り父母が出かけ姉弟で留守番をしていたときの夜、どすんッと相当重いものが落ち、家を揺るがすような大きな音がした。怖いのと、恐ろしさで息が止まりそうであった。気がついたら姉弟おびえて隅っこに固まっていた。

親戚の人は亡くなった。

- 元隣同士であった人の容態が思わしくないことを知って、家内とお見舞いに行った。大分重いと感じた。

以前に子どもさんと一緒に家に遊びに来てくれたことがあったので「良くなったらまた遊びに来て下さい。」と言い残して、暇乞いをして帰ってきた。

それから何日も経たない夜。入口の引戸が開く音がしたけれど人が来た気配は感じられなかった。「知らせに来てくれたのだネ。」と、家内と目を交わした。開いた戸が閉められる音はしなかった。その人は一日置いて亡くなった。

日常生活で存在しないはずのものを見る。物理的な現実の空間で在り得ないものを目にする。そう、幽霊を見たことである。



- その日も友達と居酒屋を何軒かハシゴをして、食事をして下宿に遅く帰った。寝ようとして布団に座ると、部屋の入口の襖に目が往った。その時、廊下をトイレに向かって歩く老人の姿が襖に影絵のように映るのを見た。

翌朝、襖を指でたたくとベニヤ板が張られており、影が映るはずがないことを知り、このことを、老人が歩いていた姿を真似て下宿の女将さんに伝えた。女将さん、このおじいちゃんは、いつも出歩くときには、そのようにして信玄袋をさげて歩いていたと、みぞおちあたりに両手で信玄袋をさげる振りを見せた。

その日、仕事から帰って来て食事を摂る部屋に入ると、線香の匂いがした。女将さん、食事の用意をしながら、おじいちゃんの位牌が小栗さんの部屋の押入れの天井裏にあったので、坊さんにお経を上げてもらったと言ったので、私は唯うなずき、このことはこれだけのことで、後々話題になることはなかった。でも、この時すうっとひと筋の風が窓の方に吹いたような気配があったことが忘れられない。

- 夜の会合が終わり、帰り道前方の橋の中ほどに目を遣った。と、そこに大柄の男性が背を向けて立っており、そのまま風に乗るような格好で、大股でどんとどんと前方に走るように去っていった。そして、消えた。

- 就寝中、誰かに起こされたように目が覚めた。目線の先の部屋の入口に、大柄の男がゆさゆさとした動作をしながら立っていた。身を起こし、驚き、凝視し、一体どこから入ってきたと問おうとしても、腹にこもったようで声にならなかった。ちょっと目をそらし再度見たときは、もう消えていた。

- その人が住宅を建て始めた。ほぼ完成間近と思われる頃、夜の会合を終えて帰り道、その家の前に家主が立っているのが見えた。家の前まで来たとき、能面のように身動きもしないで前向きに立っているその人が、私の横眼の視野に入った。でも、そのまま通り過ぎ、お互い無愛想であったと思った。しかし、立っている姿が普通の光景ではなかったと脳裏に焼き付いた。

それから日を置かないで、その人が亡くなったこと、建設中の住宅を見に行けるような容態でなかったことを、人づてに聞いた。

＊＊ 続きは佐野さんの論文の後にあります ＊＊

## 【 また、一年が過ぎてしまいました。 】

佐野 亮二

この一年間ひたすら走り続け、気が付いたらもう年が改まろうとしています。「あっちが痛い!」「こっちが痛い!」と言いながら、動き回っていますが、これも年を重ねた故と諦めています。

「この一年何をやってきたのだろうか!？」と改めて振り返ってみました。

まず厳冬の「山彦の滝」の観察会、参加者の皆さんに興味を示してもらえようような話が出来たのだろうか?

次は学社融合事業での森林教室、鳥の巣箱掛やリース作りなど、小学生や保護者の皆さんに十分理解できるような話が出来たのだろうか?

今、一番活動時間の長いものが、オホーツク森林レスキューのボランティア活動で、会員20数名で毎月一回一年間12回という結構ハードな活動で、遠軽の町有林などの手入れをしています。森林の持つ多種多様な機能を生かせるような取り組みが出来ているのだろうか?



オホーツク緑ネットワークで実施した“オホーツクみどり検定のガイド編”を受験してきました。さて、その結果は、実地試験で樹木名を間違えてしまいました。普段の勉強不足と自信過剰が招いた結果でしょうか!?

この一年間、少し恥ずかしいような、悩みの多い反省点ばかりが心に残っています。

本題のボラ・レンの活動は?

遠軽町の学社融合事業への参加協力については、興部町の安部さんには、体調

不良とのことでしたが、遠路（片道2時間）にも関わらず参加をしていただき、本当に有難く厚くお礼申し上げます。皆さんの協力を得ながら、何とか頑張っています。

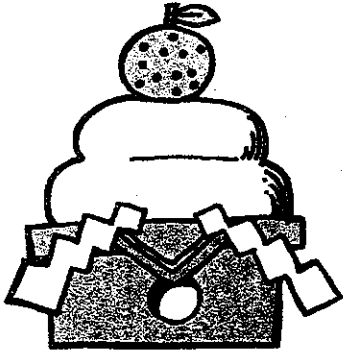
平成23年度、オホーツク支部の秋季講習会は、知床での開催で大変有意義で大成功でありました。

関係者の皆様、そして札幌方面から参加していただいた皆様には、大変お世話になりお礼申し上げます。

一番のビックニュースは、千葉 亮さんが会員になられたことです。期待しています！

悩み多き一年ではありましたが、まあまあ無事に暮らしました。これも皆様のおかげと感謝・感謝です。

新しい年を迎えて、目標は何をやるかとは、あまり考えなくなりました。とりあえず、無事で元気に一年を暮せれば満足だなんて気取っています。



皆様、また一年間仲間として  
お世話になります。  
よろしくお願い申し上げます。

夜、茶の間のソファでうたた寝をしていたとき、騒がしい音で目が覚めた。目の前に、眼鏡をかけた男性が座っており目が合った瞬間、ここが一体どこなのか、時間、場所の感覚がなくなり、夢か現実か混乱した。

私は、男にどうしてここに居るのかを問おうとしても声にならない。その時男は座ったままの姿勢で、かなりの速さで後ずさりをして小さくなり、見えなくなった。まるで映画の一場面を見ているような気がした。やっと自分の居場所が分かった。

こうしてみると今迄に、いろいろな怪奇なことに遭っているけれども、この他にも夢か現実の区別のつかないのがいくつかある。

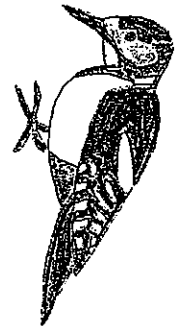
私としては、頭から抜けるように去るのを夢とし、記憶として残っているのを怪奇なこととしている。他人は、この種のことをいい加減なことを言っていると拒否反応を起こすかも知れませんが、現代の進んだ科学をもって解明できない世界があるものと思っている。

# 自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報  
 平成 23 年度 NO.6  
 平成 23 年 11 月 13 日 発行  
 北海道ボランティア・レンジャー協議会

## 〇〇木をつつくから…キツツキ

オーストラリアを除く全世界に分布、木に穴を開け、長い舌で「虫ケラ」を捕まえるので「ケラ」はキツツキのこと。留鳥で、北海道には 8 種、足は対趾足（指が 2 本ずつ向き合う）。木の幹に縦に止まれる。繁殖期にはドラミング、波形をえがいて飛ぶ。クマガラ以外のキツツキの虫を取る穴は丸い。キツツキは木に穴を開けるが、その木は幹の内部を虫に食われ始めている木だけ…木は昆虫の害から救われる。



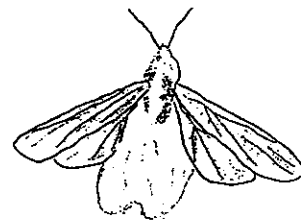
アカゲラ

アカゲラ…背に逆八の字の白斑、雄は後頭だけ赤、北海道・本州のみ、♀のみ共にドラミング、「キョッキョッキョッキョ」や飛びながら「ケレケレケレ」と鳴く。繁殖用の巣は毎年ほる。木の中のカミキリムシなどの幼虫を捕食、木の実も食べる

コゲラ…スズメ大、日本とその周辺（サハリン・朝鮮）に分布。「ギイー」と鳴く。カラ類の混群に混じることもある。昆虫・クモ・木の実を食べる。

## 〇〇トドノネオオワタムシ…雪虫

アブラムシで、雪虫の一種、ヤチダモの木で越冬（卵）、翌春、幼虫は葉や枝で育ち、子を産んで殖え、7月に生まれた♀はトドマツに移り根際に幼虫を産む。その幼虫は根に寄生するが、晩秋になると羽のある♀が現れ、飛び（雪虫）ヤチダモの木に移り産卵。



トドノネオオワタムシ  
 (大きさ羽も含め)  
 約 6mm

## 〇〇種子の散布方法

1. 風散布…タンポポ・カエデ・シラカンバ・シナノキ・ヤナギ類
2. 重力散布…ドングリ・オニグルミ
3. 動物散布
  - ① 摂食による…食べて種子が糞と共に…キイチゴ・ホオノキ・サクラ
  - ② 貯食による…ドングリ・チョウセンゴヨウ…リス・カケス・アカネズミ
  - ③ 付着型散布…殆ど草…ひつきむし
- { 鉤、棘状の器官…ダイコンソウ・キンミズヒキ・ヤブハギ・ウマノミツバ  
 粘液…ノブキ・オオバコ
4. 自動散布…果皮が裂けて種子を飛ばす  
 …カタバミ・ゲンノショウコ・スマイレ
5. 水散布…上流へはダメ  
 …オニグルミ・ココヤシ（海流）（38）



ウマノミツバ



キンミズヒキ



ノブキ



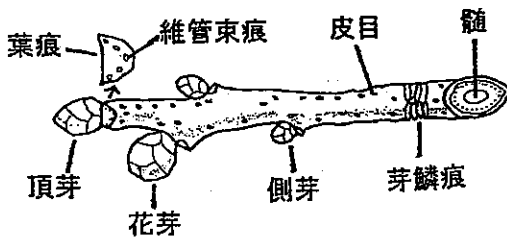
## 〇〇 シダ植物・・・どれも同じように見えるが

シダ植物は根・茎・葉の区別があり、目につくものは葉の部分で、葉身と葉柄からできています。茎は根茎として地中にあり、根は根茎からひげ状に出ています。維管束（水分や養分の通路）があり、胞子で殖えます。葉の裏に円形や線形のポツポツが見られるのはソーラス（胞子のう群）といい、胞子の入った袋の胞子のうの集まりです。裏のソーラスのない種類もあり、1つの株に栄養葉と孢子葉（これにソーラスができる）をもつものもあります。恐竜の栄えていた時代のヤシのようなものはシダ植物で20～30mのものもあつたとか。日本には700種程のシダ植物が自生し、木生シダ（茎が直立して5～8mになる）が九州や沖縄に生えています。この辺にあるのはせいぜい1.5mぐらいまでです。山菜としてクサソテツ（コゴミ）・ヤマドリゼンマイ・ツクシ（スギナ）などは栄養葉と孢子葉が別で、ワラビもあります。どれも同じように見えるシダ植物も、葉の形、つき方、ソーラスの形などで区別できます。シダにも親しみましょう。



## 〇〇 落葉広葉樹の名前を知る・・・冬芽

秋も深まり、葉を落とした落葉樹林は明るく、見通しも良くなり、野鳥も見やすくなります。また、夏とは違う樹木の姿に触れることができます。葉で樹木の名前をだいたい知ることができますが、冬芽でも出来ます。夏には殆どの樹木で特徴を持った冬芽が出来ています。葉だけでは名前を決めかねる場合でも、冬芽や枝の特徴から樹木の名前が分ることがあります。木の名前を知り、木に親しみましょう。



\*冬芽(ふゆめ：とうが)

- 鱗芽・・・芽鱗のある芽・サクラ、ヤナギ
- 裸芽・・・芽鱗のない芽・ウルシ、ニガキ
- 葉芽・・・開いて葉と枝を作る芽
- 花芽・・・花のつぼみの中に持っている芽

## 〇〇 これからの自然観察会のご案内

期日・時間	行事名	集合場所	内容
11月23日(水)10:00～12:30	西岡水源地観察会	管理事務所前	野鳥・雪上物
1月15日(日)10:00～12:30	円山登山観察会	円山登山口	野鳥・冬を味わう
*2月12日(日)10:00～12:30	冬の森の観察会	ふれあい交流館	野鳥・雪上物
*3月25日(日)10:00～12:30	森の中で春を探そう	ふれあい交流館	芽吹き・野鳥

お誘い合わせてご参加下さい。\*印は自然ふれあい交流館との共催行事です。

# 北海道ボランティア・レンジャー協議会 平成24年度 事業

月	行事名	実施月日	下見	集合・解散場所	
4	平成24年度総会・研修・懇親会	14日(日) 13:00~16:30		東区民センター(3F)講義室	
	春の花を見つけよう	26日(木) 10:00~12:30	25日(水)	交流館集合・解散	共催
5	セイヨウオオマルハナバチ防除	7日(月) 10:00~12:30	担当者のみ	開拓の村入口	
	春のありがとう観察会	13日(日) 10:00~14:30	12日(土)	交流館集合・解散	
	恵庭公園観察会	20日(日) 10:00~12:00	19日(土)	恵庭公園駐車場集合・解散	
	三角山登山観察会	27日(日) 10:00~14:00	26日(土)	緑花会館登山口集合・解散	
6	森の新緑観察会	3日(日) 10:00~12:30	2日(土)	交流館集合・解散	
	北広島レクの森観察会(フラワーズン)	17日(日) 10:00~12:30	16日(土)	レクの森入口集合・解散	
	鶴川研修	23・24(土・日)		むかわ道の駅 四季の館	
7	道北研修(北大演習林)	6日(金)~7日(土)		せいわ温泉「ルオント」集合13:00	
	オオハンゴンソウ防除	22日(日) 10:00~12:30	担当者のみ	交流館集合・解散	
8	夏の森の観察会(瑞穂の池)	9日(木) 10:15~13:30	8日(水)	村集合・解散 記念塔(昼食)	
	北海道ボランティア・レンジャー育成研修会	24・25・26日(金・土・日)		自然ふれあい交流館	
9	きのこ研修会(日帰り)	未定		道民の森・月形入口	
	秋の花でにぎわう森を歩こう	9日(日) 10:00~14:30	8日(土)	交流館集合・解散	
10	芸術の森観察会	7日(日) 10:00~12:30	6日(日)	芸術の森入口バス停留所前集合	
	秋の森の匂いをかごう	11日(木) 10:15~14:30	10日(水)	開拓の村入口集合解散	
11	晩秋の森観察会志文別コース	3日(土) 10:00~14:30	2日(金)	交流館集合・解散	
	秋のありがとう観察会	11日(日) 10:00~12:30	10日(土)	交流館集合・解散	
	西岡水源地自然観察会	23日(金) 10:00~12:30	22日(木)	管理事務所前集合・解散	
1	円山登山観察会	13日(日) 10:00~12:30	12日(土)	円山登山口集合・解散	
2	冬の森の観察会	17日(日) 10:00~12:30	16日(土)	交流館集合・解散	
3	森の中で春を探そう	24日(日) 10:00~12:30	23日(土)	交流館集合・解散	

※6月の鶴川研修会の日程は仮日程です。

# 北海道大学雨竜研究林研修計画 (案)

I、日時 平成24年7月6・7日(金・土)

II、会場 北海道大学雨竜研究林

〒074-0741

雨竜郡幌加内町字母子里

電話 0165-38-2125

ファックス 0165-38-2410

III、研修の目的 雨竜研修林の理解を深める

- 1、雨竜研究林の歴史と自然について 気象・地質・地形・植物・動物など
- 2、フィールドに出て雨竜研究林の理解を深める

IV、日程

1、集合場所

せいわ温泉「ルオント」 雨竜郡幌加内町字政和第一

電話 0165-37-2070

ファックス 0165-37-2072

※一日目の研修場所

せいわ温泉施設2階

2、一日目日程(7月6日)

- (1) 13:00 集合
- (2) 13:15~15:00 研修 進行役:研修部  
「雨竜演習林について」 守田先生
- (3) 15:00~17:00 自然散策・入浴
- (4) 17:00~18:00 夕食・懇親会準備 担当:研修部
- (5) 18:00~ 夕食・懇親会

3、二日目日程

- (1) 8:10 雨竜研修林に向け出発
- (2) 8:50 雨竜研修林着
- (3) 9:00~11:30 フィールド研修 講師:守田先生
- (4) 11:45 雨竜研修林澆
- (5) 12:45 せいわ温泉着
- (6) 12:50 解散式 進行役:研修部
- (7) 以後は、各自で入浴や昼食をとり、帰途につく

V、募集人数 37名

※宿泊はログキャビン。全部で9棟あり。収用人数 37名

VI、費用 夕食・懇親会・朝食・ログハウス代 5000円

(多少、変更の可能性あり)

VII、持ち物 布団はあります。その他、各自宿泊に必要なものを持参

VIII、交通機関 深川、名寄間のバスはあるが、当てにしない方がいい。自家用車相乗り。

# 2012年小樽支部自然観察会予定表

(北海道ボランティア・レンジャー協議会小樽支部)

No	月/日(曜日)	行き先	行程	見どころ	集合場所・時間(担当リーダー)
1	5/7(月)	オタモイ～赤岩山	オタモイ交番～ ノイシュロスホテル	春植物	小樽市総合博物館と共催 オタモイ交番前9時 (梅原)
2	6/9(土)	旭展望台周辺	小樽商大～ 松山町～展望台	初夏の植物	中央バス商大終点前9時 (工藤)
3	7/21(土)	平山(大雪)	白滝村～平山登山口	高山植物の宝庫	自家用車乗合 (一鉄)
4	8/25(土)	塩谷丸山	塩谷駅～山頂	初秋の植物	JR塩谷駅前9時 (石田)
5	9/15(土)	忍路(名所巡り)	塩谷～忍路	秋の植物 環状列石	蘭島・水車の小屋前9時 (北嶋)
6	10/20(土)	天狗山	周辺林道	紅葉・キノコ	納会 からまつ公園事務所前9時 (北原)
7	2/23(土)	毛無山	展望台～天神	カンジキ	中央バス天神停留所前9時 (北嶋)
8	3/23(土)	天狗山	山頂ロープウェイ～ 自然の村～からまつ公園	カンジキ	山頂ロープウェイ駅9時 (工藤)

## 参考

- ① 約1週間前、道新小樽版に集合場所、時間等を再掲します。
- ② 天候外の都合で、日時等変更する事もありますので事前に申し込願います。
- ③ 参加料は、300円、交通費は各自負担願います。
- ④ 自家用車の方はその旨連絡願います。(駐車場・乗り合せの可否等あり)
- ⑤ 問い合わせ等は、0134-34-3533 北嶋迄



～ 事務局 便り ～



<お知らせ>

- ① 観察会は毎年、同時期・同コースで開催されますので前日の下見時に内容が固定化しているように見受けられます。昨年からより充実した下見を目指しテーマを持って話題を提供して下さる方にレクチャーして頂き観察会のコースを歩いています。ベテラン、新会員共に沢山の話題を共有しながら自然にふれあい、スキルアップが出来たらと願っております。今年度は「ふれあい交流館」との共催の観察会のみで行います。

\* 4月～9月の話題提供の方々とテーマは以下の通りです。

4月25日(水)	道場優さん	「鳥」
5月12日(土)	五十嵐一夫さん	「花の形が決まる仕組み」
6月2日(土)	室野文男さん	「シダ」
8月8日(水)	田村允郁さん	「木の指標」
9月8日(土)	土屋忠司さん	「未定」

- ② 今年度は7月に道北支部の協力のもと北大演習林で研修会の予定です。皆様の参加をお待ちしています。後日ハガキでご案内いたします。

＜第27回 定期総会＞ 今年の総会は4月14日、東区区民センターで  
 ≪会員の多くの皆さんの参加を≫

既に、ハガキなどで今年の総会の案内が送られたと思いますが、例年とは異なって会場が変更になっています。場所などを確認の上、多くの皆さんの参加を待っています。

○ 日時 平成24年4月14日（土曜日） 13時

○ 場所 札幌市東区民センター（東区役所と併設） 3階講義室

・ 札幌市東区北11条東7丁目1-1  
 地下鉄「東豊線」東区役所前 下車

・ 研修会 13時から オホーツク支部の佐野亮二さんの講演

・ 総会 15時から

・ 懇親会 「北のささや」で

\*今年には佐野亮二さんの講演あります。佐野さんは一昨年は「林野庁長官賞」、昨年は「北海道貢献賞」を受賞されました。佐野さんの活動の様子が話されると思われしますのでとても楽しみです。なお、掲載したオホーツク支部の機関誌に彼の紹介がありますので是非読んでみてください。

＜写真展＞ <植物エネルギー> というテーマで

○ 2012年4月6日（金）～11日（水）

○ 富士フィルムフォトサロン 札幌

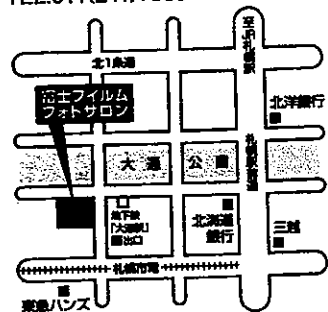
堀田清と植物を愛する仲間たちによる写真展

植物エネルギー  
 ～北海道医療大学の森～

2012年4月6日（金）～11日（水）  
 開場時間 10:00～19:00 入場無料

\* 役員の松井玲子さんから情報をいただきました。写真家でもある松井さんの自然を活写したステキな写真に会えると思います。是非、見学をしてみてください。

富士フィルムフォトサロン/札幌  
 〒060-0042 札幌市中央区大通西6丁目1番地  
 富士フィルム札幌ビル1階  
 TEL.011(241)7366



## 編集後記

- ・表紙は熊野さんが書いてくれた、豊滝から見た「冬の神威岳」です。
- ・私たちの機関誌、「エゾマツ」も遂に 100 号になりました。記念すべき号といえます。年4回の発行で、1 / 4 世紀以上、26 周年一途中で発行が難しい時期もあったようで一 を迎えることになります。20 年周年時に「特別号」を発行しているので 101 号といえるかもしれません。よく言われるように<継続は力なり>といえますが、今後は<知は力なり>といえるようにしていきたいものです。  
幸いにも会員、観察会の参加者からたくさんの原稿をいただいています。残念ながら、下見でレポートしてくれた原稿で掲載できなかったものもあります。次号に掲載したいと考えています。了解をお願いします。  
今後は形式（体裁）とともに内容の充実をはかっていきたいです。
- ・オホーツク支部の皆さんの力作の機関誌『流氷』（12 号）を縮小して掲載しています。表皮はきれいな流氷の写真で飾られています。
- ・左のページに、今年度、第 27 回定期総会の案内を載せています。《場所》はいつもと異なっていますので確かめて参加をお願いします。会員の多くの参加を待っています。
- ・私たちの会も、多くの方々が参加してくれて今年度は 200 人態勢で活動していくことになります。雨竜にある北大の演習林での自然観察、研修会という新たな計画をもしています。北大雨竜林での研修（案）を参照してください。
- ・次号 101 号は 6 月末発行の予定で、原稿は 6 月 15 日まで広報部に送ってください。

『エゾマツ』 2012年3月28日

発行

春季号 100号

会長 春日 順雄